もうもう智慧のわく本 2.

●故事成語がズバリわかる！

【韓非子編②】

小利を顧みるは、則ち大利の残なり





真理の御魂 最聖 麻原彰晃尊師

◉故事成語がズバリわかる！

【韓非子編②】

小利(しょうり)を顧(かえり)みるは、則(すなわ)ち大利(だいり)の残(ざん)なり

もりもり智慧のわく書2.





真理の御魂(みたま)
最聖 麻原彰晃尊師

はじめに

『もりもり智慧のわく書』の第二弾は、第一弾に比べ解説を多く用いた。

これは一般の読者に対して、故事成語と、そしてその意味合い、真理との関係をより深く理解していただきたいと考えたからである。

この『もりもり智慧のわく書』は、実業家やビジネスマン、あるいは一般の人たち、学生の諸君に、日々の生活において、少しでも現象を正しく見ていただきたいために書き下ろしたものである。この第二弾では、例えば「詘匠（くっしょう）」のように、現代のわたしたちが陥りがちな空理空論にとらわれる部分を諌（いさ）めてい

る成語や、あるいは「塵飯塗羹（じんぱんとこう）」のように、わたしたちが日々の生活において見落としがちな考え方の提供といった役割を果たしてくれるであろう。

そして、この本の読者が、この韓非子（かんぴし）の思索力、智慧に満足せず、より高い叡智（えいち）への道である真理に導かれますように。

一九九二年八月二十七日

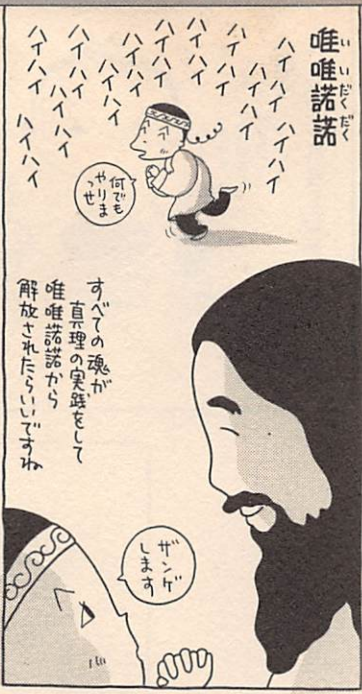
麻原彰晃

もりもり智慧のわく書 2.

【韓非子編②】



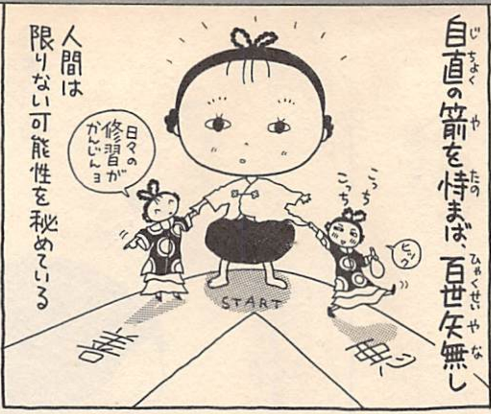
事は密なるを以て成り、語は泄るるを以て敗る

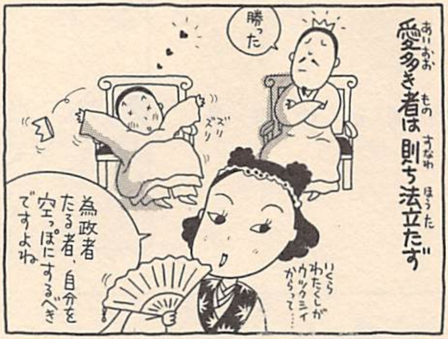


◆鴈鼎……8
◆権は見わすを欲せず、無為に素す……12
◆自直の箭を恃まば、百世矢無し……16
◆塵飯塗羹……20
◆愛多き者は則ち法立たず……24
◆千秋万歳……28
◆汗馬の労……32
◆小利を顧みるは、則ち大利の残なり……36
◆郢書燕説……42
◆余桃の罪……46
◆象箸玉杯……52
◆狗猛ければ則ち酒酸にして售れず……56
◆静退以て宝と為す……60



◆事は密なるを以て成り、語は泄るるを以て敗る……64
◆濫吹……68
◆唯唯諾諾……72
◆詘匠……76







◆法は貴に阿らず、縄は曲に撓まず……86
◆一夔已に足る……90
◆鶏をして夜を司らしめ、狸をして鼠を執らえしむ……96
◆甲冑 蟣虱を生ず……102
◆文王 菖蒲の葅を嗜む……106

◆隣人の父を疑う……110
◆長袖善く舞い、多銭善く賈う……114
◆道に遺ちたるを拾わず……118
◆刻削の道は、鼻は大に如くに莫く、目は小に如くは莫し……122
◆虚なれば則ち実の情を知り、静なれば則ち動の正を知る……126
◆累卵の危うき……130
◆知の難きに非ざるなり、知に処すること則ち難きなり……134
◆櫝を買い、珠を還す……140





●編集スタッフ
聖者ヤソーダラー最上善逝
聖者マンジュシュリー・ミトラ供養値魂
聖者マハーナーマ化身成就師
聖者ヴァンギーサ上流師
聖者タントラバッダー到達光正師
戸田龍哉
瓦吹英宣
●イラストレーション
片桐りえ
●カバー・デザイン
スワミ・タントラスバー
●題字
スワミ・ヴァラカツ

❖ 鴈鼎

［韓非子、説林下］ 斉伐魯索讒鼎。魯以其鴈往。斉人曰、「鴈也。」魯人曰、「真也。」斉曰、「使楽正子春来、吾将聴子。」魯君請楽正子春。楽正子春曰、「胡不以其真往也。」君曰、「我愛之。」答曰、「臣亦愛臣之信。」

【書き下し文】

斉、魯を伐ちて讒鼎を索む。魯其の鴈を以て往かしむ。斉人曰く、「鴈なり」と。魯人曰く、「真なり」と。斉曰く、「楽正子春をして来らしめよ、吾将に子に聴かんとす」と。魯君、楽正子春に請う。楽正子春曰く、「胡ぞ其の真を以て往かざるや」と。君曰く、「我、之を愛む」と。答えて曰く、「臣も亦臣の信を愛む」と。

【訳】

斉が魯を討伐して、讒鼎という宝物を求めた。そこで、魯は使者に、その偽物を持たせてやった。斉の人は「偽物だ」と言い、魯の人は「本物だ」と言った。そこで、斉がいうには、

「では、楽正子春をよこしなさい。我々は彼に尋ねてみよう」と。

そこで、魯の君主は、楽正子春に（斉に行って本物だと言ってほしいと）頼んだ。楽正子春がいうには、

「どうして本物を持っていかないのですか」と。

君子がいうには、

「わしは本物が惜しいのだ」と。

楽正子春がそれに対していうには、

「わたしもわたしの信義を惜しみます」と。



【注】

・楽正子春――春秋時代、魯の人。曾子（そうし）の弟子。

＊

今日の故事成語は「贋鼎（がんてい）」です。「贋鼎」とは、「贋（がん）」――「雁（かり）」、つまり鳥の雁（かり）の別の種、――ちょっと難しい漢字ですが、その字と、そして「鼎（てい）」は、鼎（かなえ）という字です。

鼎とは、皆さんもご存知のとおり、古代中国において祭のときなどに使われた、物を煮炊きする三本足のものですが、この鼎はもともと国宝として珍重されたものです。

ところで、春秋戦国時代、斉（せい）が魯（ろ）を討ち、つまり魯に勝ち、そして魯に対して〝讒鼎（ざんてい）〟という魯の国宝を要求しました。しかし、魯の王室は斉をだまし、そして偽物の讒鼎を斉に献上したのです。そしてそれ以来、偽物、――これを贋鼎というのです。つまり、偽の鼎という意味です。

ところで、もし魯の人がカルマの法則を知っていたら、このようなインチキはしなかったはずです。なぜならば、人をだませば必ずだまされるのですから。



鴈鼎（がんてい）
これが讒鼎（ざんてい）です
もし魯（ろ）の人がカルマの法則を知っていたら……
だませば必ずだまされる……と
KARMA えんまちょう

❖権は見わすを欲せず、無為に素す

［韓非子、揚権］　夫香美脆味、厚酒肥肉、甘口而疾形、曼理皓歯、説情而損精。故去甚去泰、身乃無害。権不欲見、素無為也。

【書き下し文】

夫の香美脆味、厚酒肥肉は、口に甘くして形を疾ましめ、曼理皓歯は、情を説ばせて精を損なう。故に甚を去り泰を去らば、身乃ち害無からん。権は見わすを欲せず、無為に素するなり。

【訳】

あの香りがよいもの、軟らかくてうまいもの、すなわち、芳醇な酒、肥え太った肉は、

口あたりはよいが（つい飲み過ぎたり食べ過ぎたりするから）体をこわすし、肌理細やかな肌と白い歯を持つ美女は、男の心を喜ばせるが（つい溺れてしまうから）精力を損なうことになる。

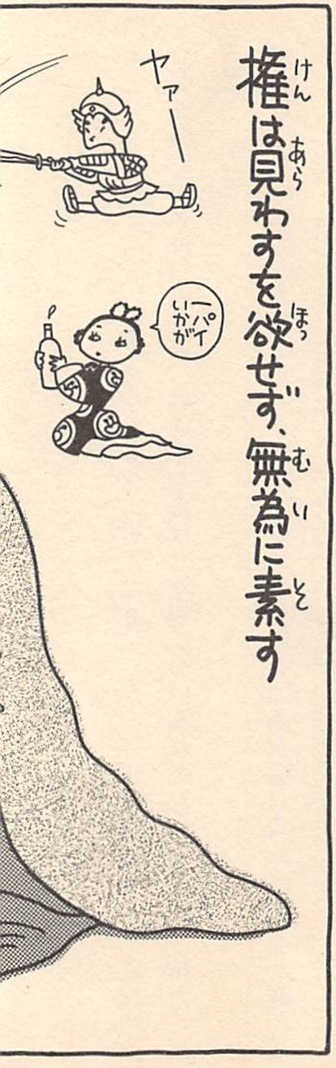
したがって、こうした度を過ごすことを慎めば、それで身に害はない。（君主の権力もそうであって、）権力は人に現わすべきではなく、無為の態度を守るのがよい。

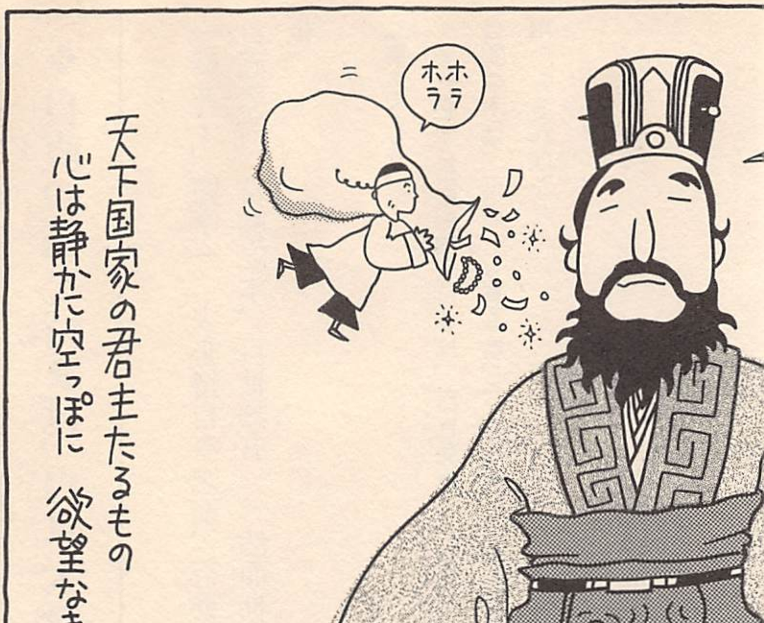


今日の故事成語はちょっと長いですよ。「権は見わすを欲せず、無為に素す」です。

これはどういう意味かというと、天下国家の君主たるものは、自分自身の大いなる権力を群臣に対してみだりに振り回してはならない。つまり、無為に、そして虚静にするべきであるという教えです。

ところでこの無為、あるいは虚静という言葉は、もともと仏教用語と大変深い関係があります。無為とは心の働きの静止した状態、つまり欲望なき状態であり、虚静とは心を空っぽにし、そして静かにした状態ということができるでしょう。ということは、真理の実践、つまりオウム真理教の実践こそ、あなたを天下国家の君主にするのかもしれませんね。





ホホラ
ラ
天下国家の君主たるもの
心は静かに空っぽに　欲望なき状態に

❖自直の箭を恃まば、百世矢無し

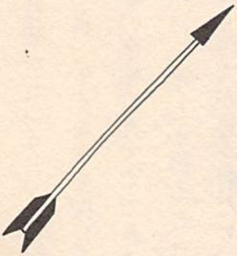
［韓非子、顕学］　夫必恃自直之箭、百世無矢、恃自圜之木、千世無輪矣。自直之箭、自圜之木、百世無有一。然而世皆乗車射禽者何也。隠括之道用也。

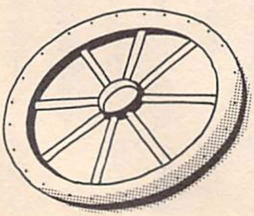
【書き下し文】

夫れ必ず自直の箭を恃まば、百世矢無く、自圜の木を恃まば、千世輪無し。自直の箭、自圜の木は、百世一も有る無し。然り而して世皆車に乗り禽を射るは何ぞや。隠括の道用いらるればなり。

【訳】

そもそも、もし自然に真っすぐになっている矢の材料を当てにしていたならば、百年に一本の矢も得られないし、もし自然に真ん丸になっている木材を当てにしていたならば、千年に一つの車輪も得られない。自然に真っすぐになっている矢の材料や、自然に真ん丸になっている木材は、百年に一つもないのである。それにもかかわらず、世の中では皆車に乗り、鳥獣を射ているのはなぜか。材料を枠（わく）にはめて変形させる器具が用いられるからである。



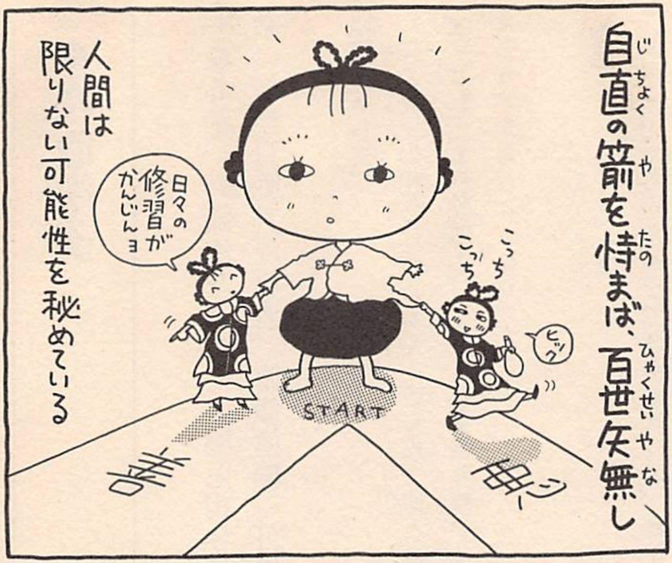


今日の故事成語は「自直の箭を恃まば、百世矢無し」。これと全く同じ意味で「自圜の木を恃まば、千世輪無し」。これはどういう意味かというと、次のような意味です。

つまり、もし矢にする木があったとして、真っすぐな木を探し求めていたのでは百年に一本しかない。同じように、その当時は車の車輪は丸太でできていましたから、車輪にするようなもともと円い木の存在は、千年に一本しか得ることはできない。つまり、矢にしろ木にしろ、それを加工して初めて多くの人が鳥を射たり、あるいは車に乗ったりすることができるんだというたとえです。これは、生まれつき智慧や徳を有している人がいるわけではなく、智慧や徳は学ぶことによって結果として得られるんだという教えです。

ところで、真理の目から見て、この教えは正しいといえます。真理では、孟子の性善説も採りませんし、あるいは荀子の性悪説も採りません。では、どの説を採るのか。それはまさに今日の故事、つまり「自直の箭を恃まば、百世矢無し」を採るのです。

人は努力を積み上げることによって、つまり真理の言葉を使うならば、記憶し、それを繰り返し繰り返し行なうことによって、智慧あるいは徳というものを増大させます。



したがって、たとえ生まれが初めから良いとしても、その人が悪い修習、悪い記憶、これを繰り返した場合、当然悪になりますし、逆に生まれが悪いとして、善や徳の記憶、そして修習を行なった場合、それは良くなるのです。

つまり、人間は限りない可能性を秘めている、そしてそれは日々の正しい教学と、そして正しい言葉、行為、心の働きの積み上げでいかようにも変わるのだ、というのが真理の教えなのです。

さあ皆さんも性善説や性悪説にとらわれず、しっかり日々の修行を行なってください。

❖塵飯塗羹（じんぱんとこう）

［韓非子、外儲説左上］　夫嬰児相与戯也、以塵為飯、以塗為羹、以木為胾。然至日晩必帰饟者、塵飯塗羹、可以戯而不可食也。

【書き下し文】

夫（か）の嬰児（えいじ）の相与（あいとも）に戯るるや、塵（ちり）を以（もっ）て飯（めし）と為（な）し、塗（つち）を以て羹（あつもの）と為し、木を以て胾（し）と為す。然（しか）れども日晩（く）るるに至りて必ず帰り饟（しょう）するは、塵飯塗羹（じんぱんとこう）は、以て戯れとすべくして食らうべからざればなり。

【訳】

あの幼児たちがみんなで遊ぶときには、塵をご飯とし、泥をスープとし、木の端を肉

片とする。けれども、日が暮れたら必ず家に帰って食事をするのは、塵のご飯や泥のスープでは、遊ぶことはできても食べることができないからである。



塵飯塗羹

今日の故事成語は「塵飯塗羹」です。

この塵飯塗羹とは、塵の飯と泥のスープ。つまり、子供がままごとで使うご飯やスープのことを表わしています。これは、まさに韓非子が法家の立場から儒家を批判した言葉です。つまり、「儒家の教えは塵飯塗羹である」と。

ところで、真理においても塵飯塗羹が存在します。それは、いろいろな教えをかき集めてき、そしてその教えをこれ見よがしに人に話す。しかしその実、言葉、行動が全く伴わず、結果的にただ単に口からの教えだけしか吐かない、そういう人たちを指します。

いくら瞑想修行を行なったとしても、その人の言葉や行動が神々と等しくならない限り、全く瞑想は無意味なのです。

さあ皆さんも塵飯塗羹にならないよう、日々の修行に精を出し頑張ってください。


すなわち
空とは
絶対矛盾の
自己同一
やーめた さぁ もうおうちに帰って本物のごはん食べよっと!!
うん
パン
パン

❖愛多き者は則ち法立たず

［韓非子、内儲説上］　愛多者則法不立、威寡者則下侵上。是以刑罰不必、則禁令不行。

【書き下し文】

愛多き者は則ち法立たず、威寡なき者は則ち下上を侵す。是を以て刑罰必せざれば、則ち禁令行われず。

【訳】

君主に情愛が多過ぎると法令は行なわれず、威厳が乏しいと下が上を侵害する。だから、刑罰が厳格に行なわれなければ、禁令は行なわれないのである。


君主の
いぬまに

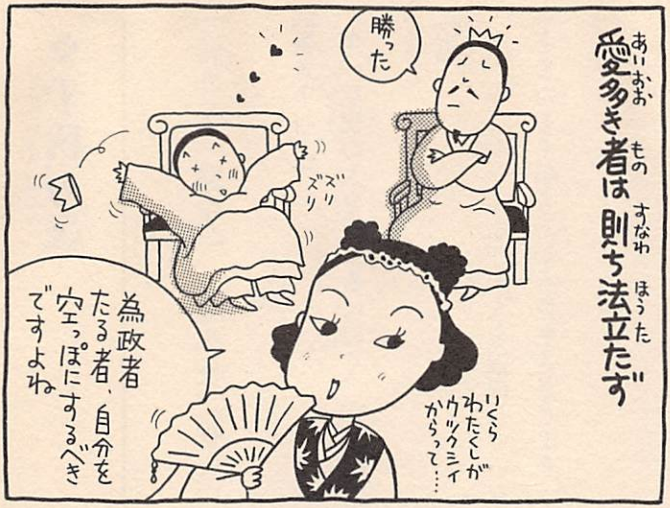
今日の故事成語は「愛多き者は則ち法立たず」です。

この故事成語は、中国史を見る限り多くの実例を有しています。特に典型的な例としては、漢・楚の対決、つまり劉邦と項羽の対決。これにまず第一に目をやることができるでしょう。

項羽は虞美人を愛しました。そして、愛するがあまり判断を見誤り、自分の最も大切な参謀である范増を自分の陣営から外してしまいました。そして、その結果として、項羽は劉邦に破れたのです。

また、もう一つ有名な例は、唐の玄宗皇帝の話を思い浮かべることができます。唐の玄宗皇帝は、「開元の治」といわれる大変な善政を敷きましたが、楊貴妃の登場以来政治が乱れ、そして自分の愛する楊貴妃を殺し、そして自分自身も力なき皇帝となり、そしてそれによって唐帝国は衰退へと向かったのです。もちろん皆さんもこのことはよくご存じのはずです。

また同じ例として、唐の高宗、彼も皆さんのよく知っている則天武后に対する寵愛ゆえに政治を乱しました。つまり、愛情の多い者は、法律によって国を統治することがで



きないということはいえるでしょう。

ところで、これはヨーガ理論にのっとって考えると、大変わかりやすい教えであるといえます。権力は喉のチァクラ、ヴィシュッダ・チァクラに存在します。そして、愛情はその下のアナハタ・チァクラに存在するのです。したがって、権力を有している者が、その下のチァクラ、アナハタ・チァクラに意識が移った瞬間、周りの人と同じ人間の意識状態となり、それによって統治形態は崩れてしまうのです。

したがって、為政者たる者、自己を空っぽにし、そして黙々とすべての魂のために働くべきではないでしょうか。

❖千秋万歳（せんしゅうばんざい）

［韓非子、顕学］　今巫祝之祝人曰、「使若千秋万歳。」

【書き下し文】

今、巫祝（ふしゅく）の人を祝するに曰（いわ）く、「若（なんじ）をして千秋万歳ならしめん」と。

【訳】

今、みこやかんなぎが人を祝福していうには、

「あなたを千年も万年も長生きさせよう」と。

千秋万歳



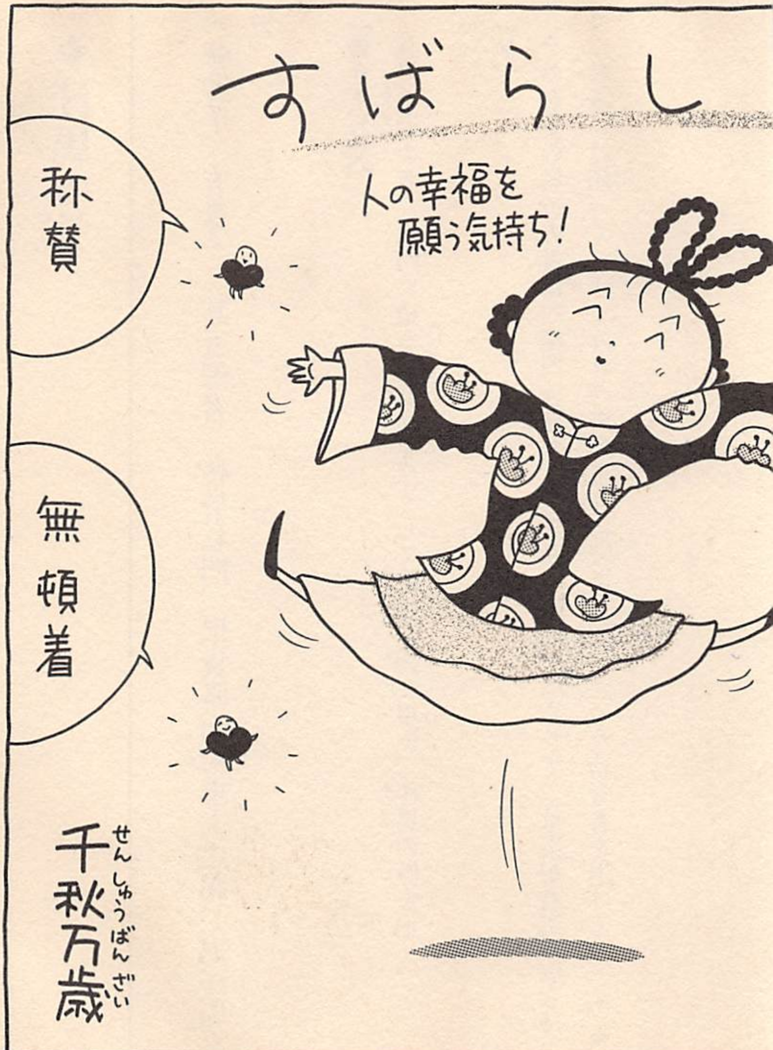


今日の故事成語は「千秋万歳」、あるいは「万歳千秋」です。これは千の秋、あるいは万年の年月を祝うという意味です。

真理の実践には、四つの心の働きの実践があります。この四つの偉大な心の働きの実践は、すべての魂を慈しむこと、すべての魂に哀れみを持つこと、そしてすべての魂を称賛すること、すべての魂のいかなる要素に対しても無頓着でいることの四つです。

そして、この千秋万歳の考え方は、まさに三番目の称賛、あるいは一番目の慈愛と共通するものを感じさせます。いずれにしろ人を誉めること、人を称賛すること、あるいは人の幸福を願うこと、これは素晴らしいことです。

皆さんも頑張って、今日から嫉妬の心を断ち、人を害する心を断ち、そして人の幸福を願おうではありませんか。


すばらし
人の幸福を願う気持ち！
称賛
無頓着
千秋万歳
せんしゅうばんざい

❖ 汗馬(かんば)の労(ろう)

［韓非子、五蠹］　其近御者、積於私門、尽貨賂而用重人之謁、退汗馬之労。

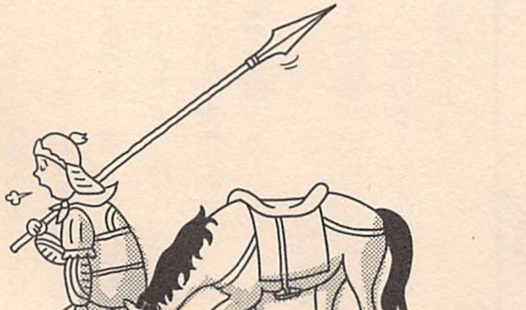
【書き下し文】

其の近御(きんぎょ)の者、私門に積み、貨賂(かろ)を尽くして重人(ちょうじん)の謁(えつ)を用い、汗馬(かんば)の労を退く。

【訳】

その君主の側近の者は、権門に群がり、賄賂の限りを尽くして、重臣が君主に取り持ってくれるのに頼って、汗まみれの馬のように戦場を駆け回った功労者を退けるのである。

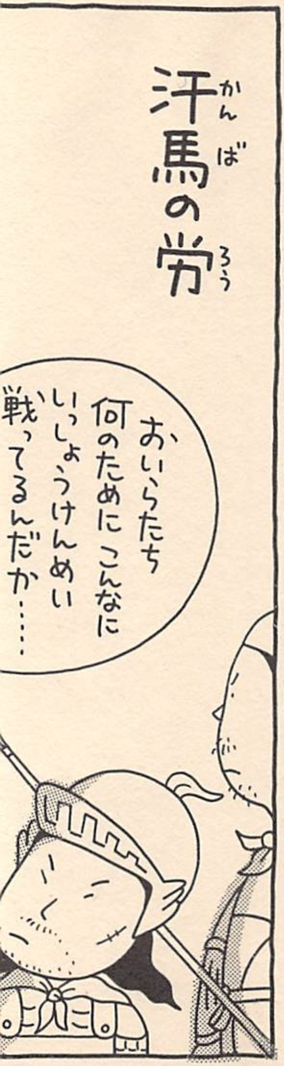
汗馬の労

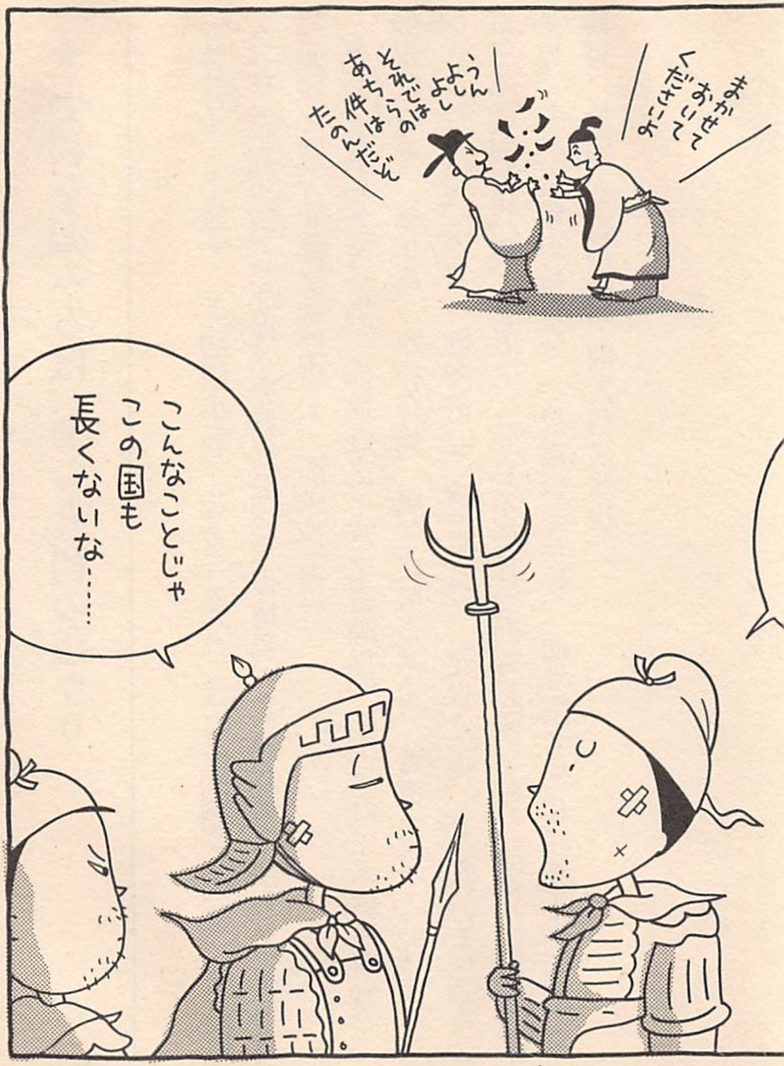


今日の故事成語は、「汗馬の労」、または「犬馬の労」です。「汗馬の労」とは、馬が戦場を汗して駆け巡る様子を表わし、「犬馬の労」――、これも全く同じ意味です。

これは、本来国というものは、戦場を汗して走り回る馬の乗り手、つまり戦場で活躍した者を優遇しなければならないのに、そうではなく、国の君主の側近が、門閥や、あるいは権力者に媚びへつらい、その賄賂を得るために不公正な重用をしたり、あるいは、その人たちの要望を聞き入れることによって、逆に戦場で頑張った人たちの労をねぎらわないことについてのことわざです。

しかし、今の国の政治を見ると、この賄賂はもうすでに常識。それだけではなく、私企業間でもこの賄賂作戦は展開されています。果たして、このような法則に反する国がいつまでもつのでしょうか？ わたしには、それが大変疑問です。




まかせておいてくださいよ
うんよしよし
それではあちらの件はたのんだぞ
こんなことじゃこの国も長くないな……

❖小利を顧みるは、則ち大利の残なり

［韓非子、十過］　奚謂顧小利。昔者晋献公、欲仮道於虞以伐虢。荀息曰、「君其以垂棘之璧与屈産之乗賂虞公、求仮道焉、必仮我道。」……乃使荀息以垂棘之璧与屈産之乗賂虞公、而求仮道焉。

虞公、貪利其璧与馬、而欲許之。宮之奇諫曰、「不可許。夫虞之有虢也、如車之有輔。輔依車、車亦依輔。虞虢之勢正是也。若仮之道、則虢朝亡、而虞夕従之矣。不可。願勿許。」虞公弗聴。遂仮之道。荀息伐虢而還反。処三年、興兵伐虞、又尅之。荀息牽馬操璧而報献公。献公説曰、「璧則猶是也、雖然馬歯亦益長矣。」故虞公之兵殆、而地削者何也。愛小利而不慮其害。故曰、「顧小利、則大利之残也。」

【書き下し文】

奚をか小利を顧みると謂う。昔者晋の献公、道を虞に仮りて以て虢を伐たんと欲す。荀息曰く、「君其れ垂棘の璧と屈産の乗とを以て虞公に賂い、道を仮りんことを求めば、必ず我に道を仮さん」と。……乃ち荀息をして垂棘の璧と屈産の乗とを以て虞公に賂いて、道を仮ることを求めしむ。

虞公、其の璧と馬とを貪利して、之を許さんと欲す。宮之奇諫めて曰く、「許すべからず。夫れ虞の虢有るは、車の輔有るが如し。輔は車に依り、車亦輔に依る。虞虢の勢いは正に是なり。若し之に道を仮さば、則ち虢朝に亡びて、虞夕に之に従わん。不可なり。願わくは許す勿れ」と。虞公聴かず。遂に之に道を仮す。荀息虢を伐ちて還反す。処ること三年、兵を興し虞を伐ち、又之に尅つ。荀息馬を牽き璧を操りて献公に報ず。献公説んで曰く、「璧は則ち猶お是なり。然りと雖も馬歯は亦益〻長ぜり」と。故に虞公の兵殆うくして、地削らるるは何ぞや。小利を愛しんで其の害を慮らざればなり。故に曰く、「小利を顧みるは、則ち大利の残なり」と。

【訳】

何を「小さな利益にかかずらう」というのであろうか。

昔、晋の献公が、虞に道を通してもらって、虢を討伐しようと企てた。臣下の荀息がいうには、

「わが君が、垂棘の玉と屈産の馬を虞公に贈り、道を通してほしいとお頼みになりましたなら、きっと道を通してくれるでしょう」と。

……そこで、荀息に命じ、垂棘の玉と屈産の馬とを虞公に贈って、道を通してほしいと頼ませた。

虞公は、その玉と馬とに目がくらんで許そうとした。臣下の宮之奇が諫めていうには、

「許してはなりません。そもそも、わが虞の隣に虢があるのは、車の底板に側板が付いているようなものです。側板は底板に寄りかかり、底板も側板に寄りかかっております。つまり、虞虢両国の形勢は、ちょうどこのような関係なのです。もし晋に道を通らせたなら、虢は明朝にも滅びましょうし、わが虞は明晩にも続いて滅びましょう。いけません。お許しにならないようお願い申し上げます」と。

しかし、虞公は聞き入れず、とうとう晋に道を貸すことにした。荀息は虢を討伐して、一旦（いったん）は晋に引き上げた。だが、それから三年経つと、兵を興して虞を討伐し、またも打ち勝ったのである。

そして、荀息は献上した馬を引き、玉を奉じて、献公に報告した。献公が喜んでいうには、

「玉はもとのままだが、しかし馬の歯はますます伸びているぞ」と。

つまり、虞公の軍が苦しめられて、国土が削られたのはどうしてか。それは、小さな利益に心を奪われ、そのための損害を考えなかったからである。したがって、「小さな利益にかかずらうのは、大きな利益を損なうことになる」というのである。

【注】

・晋の献公——春秋時代、晋の君主。覇者である晋の文公の父。

・荀息——春秋時代、晋の公族。

・虞公——春秋時代、虞の君主。

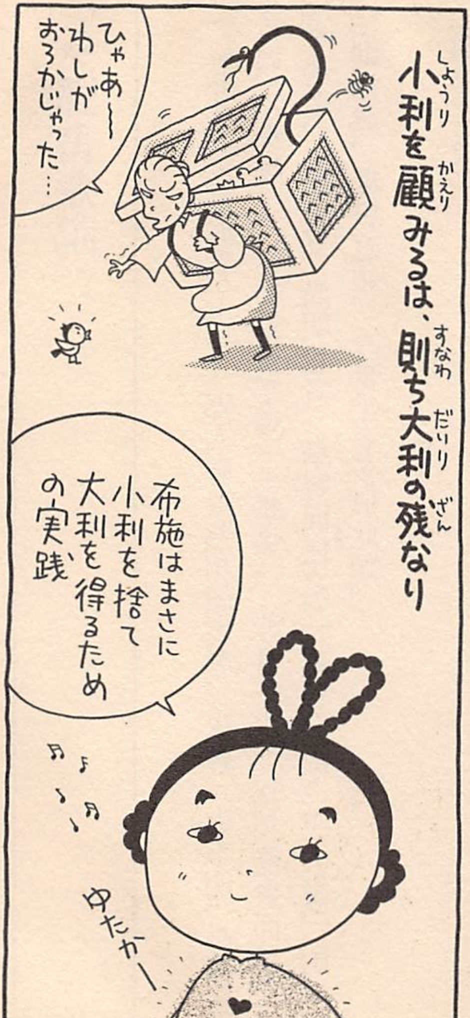
・宮之奇――春秋時代、虞の大夫。
・垂棘、屈――晋の地名。

＊

今日の故事成語は、「小利を顧みるは、則ち大利の残なり」です。
この表現は、別に二通りの表現をなすことができます。それは「小利を貪り、以て大利を失う」と、それから、『論語』に出てくる「小利を見れば則ち大事成らず」と同じ意味合いです。つまり、このことわざの意味合いは、小利にとらわれると大きな利益を傷つけるという意味です。
では、この「小利」とはどういう字かといいますと、これは小さな利益という意味です。そしてそれに反して、「大利」とは大きな利益という意味のことです。では「残」とは何かというと、これはもともと、「残り・残す」という意味ですが、これは「傷つける」という意味があるのです。つまり、小利にとらわれると大きな利益を傷つけますよという意味なのです。
ところで、真理の実践の中には、〝布施〟という教えがあります。この布施は、まさに

小利を捨て大利を得るための実践であると思われます。なぜならば、わたしたちの小さな善行が心に素晴らしい働きをもたらし、そして、それによって大きな利益を得ることができるからです。

皆さんも、布施の実践をなさってみてはいかがですか?



❖郢書燕説

［韓非子、外儲説左上］　郢人有遺燕相国書者。夜書、火不明。因謂持燭者曰、「挙燭。」云而過書挙燭。「挙燭」、非書意也。燕相受書而説之曰、「挙燭者、尚明也。尚明也者、挙賢而任之。」燕相白王。王大説、国以治。治則治矣、非書意也。今世学者多似此類。

【書き下し文】

郢人に燕の相国に書を遺る者有り。夜に書すれば、火明らかならず。因りて燭を持する者に謂いて曰く、「燭を挙げよ」と。云いて過ちて燭を挙げよと書す。「燭を挙げよ」とは、書の意に非ざるなり。燕相、書を受けて之を説きて曰く、「燭を挙ぐとは、明を尚ぶなり。明を尚ぶとは、賢を挙げて之に任ずるなり」と。燕相、王に白す。王大いに説

び、国以(もっ)て治まる。治まるは則ち治まるも、書の意に非(あら)ざるなり。今の世の学者、多く此の類に似たり。

【訳】

郢(えい)の人で、燕(えん)の宰相に手紙を送った者がいた。夜に代筆させていたので、明かりが暗い。そこで、灯火を持っている者に告げていうには、

「灯火を高く上げよ」と。

そう言われると、誤って「灯火を高く上げよ」と書き込んだ。「灯火を高く上げよ」とは、手紙の真意ではなかったのである。

燕の宰相は、手紙を受け取って説明していうには、

「『灯火を高く上げよ』とは、明(めい)を尊べということである。明を尊べとは、賢者を挙げて任用せよということである」と。

燕の宰相は、このことを王に申し上げた。すると、王は大いに喜び、国はそのために治まった。

治まったことは治まったが、手紙の真意ではなかったのである。今の世の学者には、このような類いが多いのだ。

*

今日のことわざは、「郢書燕説（えいしょえんせつ）」です。

これは、郢（えい）という国の人が書いた書簡を、燕（えん）の国の人が解説する——、つまり、郢の国の人の真意がわからず、燕の人がそれを解説する、わかっていないのに解説するという意味合いです。これについては、面白いエピソードがあります。

これは、少し前の話にさかのぼりますが、ある年の入試問題に、ある作家の話が載りました。そして、そこで設問が設置されたのです。ところがその後、その作家は生きていまして批判を加えました。

「わたしは、あのような解答、あのような意味において、その文章を書いた覚えはない。」

真理の教えにおいて、例えば仏教の範疇からいうならば、学者がよくいろいろな仏典を解説します。しかしそれは、実際に修行という体験がないのに解説するわけですから、かなり多くの間違いが見られます。例えば、仏典においても、『創世期経』などでは、学

者は修行者になれなかった魂が落ち行く先であると説いています。

あなたは学者になりますか？　それとも、学者よりステージの高い聖者の道を選びますか？　それはあなたの魂が、前生においてどのような生き方をしたか、そこで決まりますね。



❖余桃の罪

〔韓非子、説難〕　昔者弥子瑕有寵於衛君。衛国之法、竊駕君車者罪刖。弥子瑕母病。人間往、夜告弥子。弥子矯駕君車以出。君聞而賢之曰、「孝哉。為母之故、忘其刖罪。」異日与君遊於果園。食桃而甘、不尽以其半啗君。君曰、「愛我哉。忘其口味、以啗寡人。」及弥子色衰愛弛、得罪於君。君曰、「是固嘗矯駕吾車、又嘗啗我以余桃。」

【書き下し文】

昔者弥子瑕、衛君に寵有り。衛国の法、竊かに君車に駕する者は罪として刖せらる。弥子瑕の母病む。人、間かに往き、夜、弥子に告ぐ。弥子、矯りて君車に駕し以て出づ。君聞きて之を賢として曰く、「孝なるかな。母の故の為に、其の刖罪なるを忘る」と。異

日、君と果園に遊ぶ。桃を食らいて甘しとし、尽くさずして其の半ばを以て君に啗わす。君曰く、「我を愛するかな。其の口味を忘れて、以て寡人に啗わす」と。弥子、色衰へ愛弛むに及び、罪を君に得たり。君曰く、「是れ固より嘗て矯りて吾が車に駕し、又嘗て我に啗わすに余桃を以てせり」と。

【訳】

昔、弥子瑕は、衛の君主に寵愛されていた。

衛の国の法律によると、勝手に君主の車に乗った者は、足切りの刑に処せられることになっていた。

あるとき、弥子瑕の母が病気になり、ある人がひそかに出向いて、夜、弥子にそれを知らせた。そこで、弥子は君主の許可があったと偽って、君主の車に乗って見舞いに出かけた。君主はこのことを聞くと、立派だと誉めていうには、

「孝行ものだなあ。母の病気のために、足切りの刑に処せられることも忘れるとは」と。

またある日、君主のお供で果樹園に遊びに行った。桃を食べたところ、うまかったの

で、全部食べずにその半分を君主に勧めた。君主がいうには、
「わしを愛しておるのだなあ。おいしい味も忘れて、わたくしに食べさせてくれるとは」
と。

やがて、弥子の容色が衰え、寵愛も薄れてしまうと、君主から罪を受けるようになった。すると、君主がいうには、
「こいつは、以前偽ってわしの車に乗ったことがあったし、また、わしに食いかけの桃を食わせたことがあったぞ」と。

【注】

・弥子瑕――春秋時代、衛の霊公(れいこう)の嬖大夫(へいたいふ)。

*

今日の故事成語は、「余桃(よとう)の罪(つみ)」です。「余桃の罪」とは、「余りの桃の罪」という意味です。

この話はよく教科書にも見られますが、春秋時代、衛(えい)の君主に寵愛(ちょうあい)された弥子瑕(びしか)とい

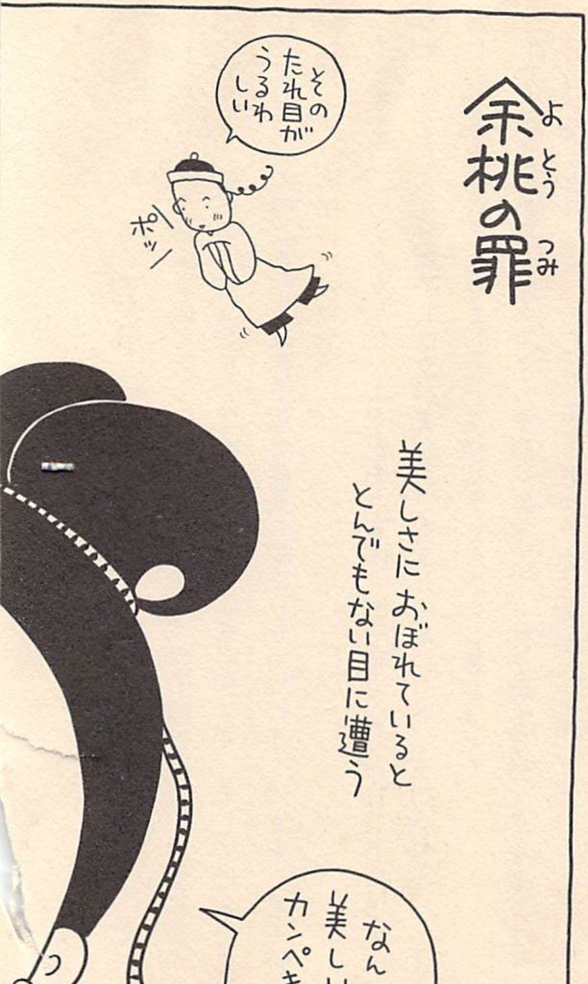
う美青年がいました。つまり、衛の国の君主とこの弥子瑕は、ホモの関係にあったわけです。そして、まだ弥子瑕が若くて美しかったころ、弥子瑕の母親が重病にかかりました。そこで、弥子瑕は王の臣下をだまし、王の馬車を用意させ、そして母親を見舞いに行きました。このとき、王は弥子瑕を寵愛し夢中になっていましたから、彼を罪に服させるどころか称賛したのです。

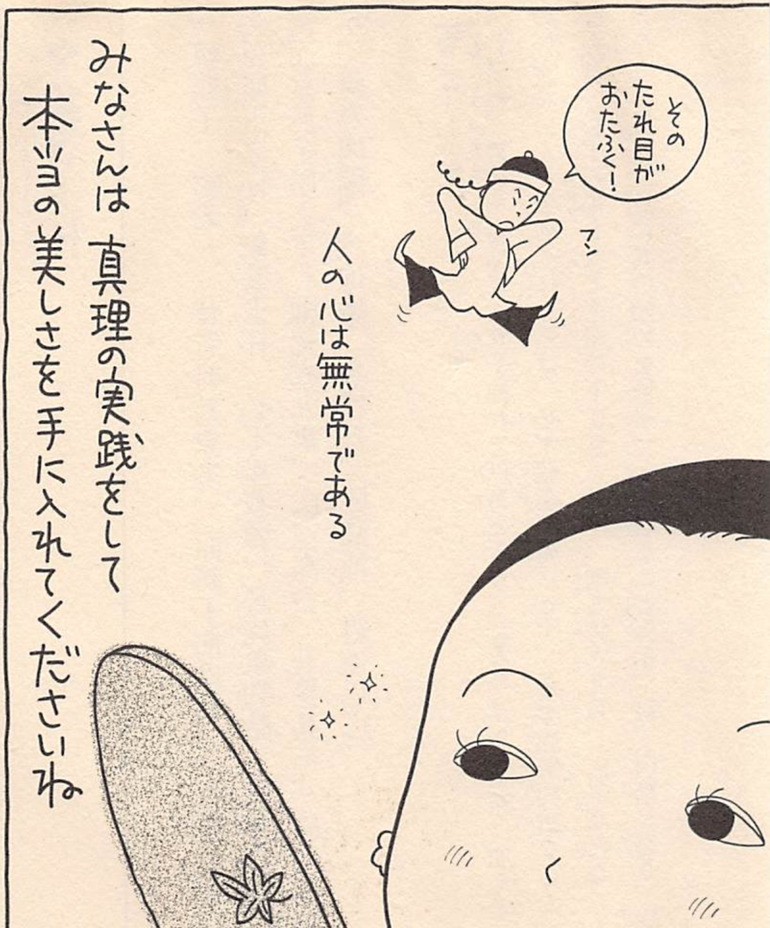
あるとき、このようなエピソードがあります。弥子瑕と王は桃園に行きました。そしてその桃をちぎり、弥子瑕は食べました。あまりのおいしさにその半分を、つまり食べ残した半分を王様にあげました。王様はそれを大いに喜びました。

しかし、人の形状――スタイルや顔は無常です。弥子瑕も当然、年を取ります。そして魅力がなくなります。そして、年を取った弥子瑕がある罪を犯しました。そのとき、王は昔のことをほじくり返し、「あのとき弥子瑕は、偽ってわたしの馬車を使った」だとか、「わたしに残りの桃を食わせた」だとか言って、大いに罰したのです。

この「余桃の罪」は、わたしたちに大きな示唆を与えてくれます。それは、今大変美しいあなたが、その美しさにもしおぼれていると、未来においてとんでもない目に遭う

んだということ。それから、人の心は大変無常である、つまり変化しやすいということ。
この二つを教えてくれます。
あなたがこのようなものにとらわれず、真理の実践をなさり、本当の意味での美しさを獲得したら、この「余桃の罪」のようなことにはならないでしょう。




そのたれ目がおたふく！
人の心は無常である
みなさんは 真理の実践をして
本当の美しさを手に入れてくださいね

❖象箸玉杯

［韓非子、喩老］　昔者紂為象箸、而箕子怖以為、「象箸必不加於土鉶、必将犀玉之杯。象箸玉杯、必不羹菽藿、必旄象豹胎。旄象豹胎、必不衣短褐而食於茅屋之下、則錦衣九重、広室高台。吾畏其卒、故怖其始。」居五年、紂為肉圃、設炮烙、登糟丘、臨酒池、紂遂以亡。

【書き下し文】

昔者紂、象箸を為りて、箕子怖れて以為えらく、「象箸は必ず土鉶に加えず、必ず犀玉の杯を将いん。象箸玉杯ならば、必ず菽藿を羹にせず、必ず旄象豹胎ならん。旄象豹胎ならば、必ず短褐を衣て茅屋の下に食らわず、則ち錦衣九重、広室高台ならん。吾、其の卒りを畏る、故に其の始めを怖る」と。居ること五年、紂、肉圃を為り、炮烙を設け、

糟丘に登り、酒池に臨み、紂遂に以て亡ぶ。

【訳】

昔、紂王が象牙の箸を作ると、箕子は恐れて、こう思った。

「象牙の箸は、きっと土器に添えられることはなく、きっとサイの角や玉で作った杯が用いられるだろう。象牙の箸や玉の杯となれば、きっと豆や豆の葉をスープにするような料理はなく、きっと旄牛の肉、象の肉、ヒョウの腹の子といった料理ができるだろう。旄牛の肉、象の肉、ヒョウの腹の子の料理となれば、きっと丈の短い粗衣を着て、茅ぶきの家で食べることはなく、錦の衣を九枚も重ね着して、広い部屋とか高殿で食べることになるだろう。わたしはその行く末を案じるがゆえに、その初めである象牙の箸を恐れる」と。

それから五年経つと、紂王は肉の畑を造り、火あぶりの刑を設け、酒糟の丘に登れるようにし、酒の池を眺められるようにし、とうとう紂王は滅んだのである。

【注】

・紂王――殷の最後の王。夏の桀王と併せて、暴虐無道の代表とされる。
・箕子――殷の人。紂の諸父。
・旄牛――長い毛のある牛のこと

＊

今日の故事成語は、「象箸玉杯」です。「象箸」とは、象の牙で作った箸、そして「玉杯」というのは、玉でできた杯という意味です。

これは、どんどん贅沢し、それがエスカレートしていく様を表わしています。この「象箸玉杯」は、周の文王に仕掛けられた殷の紂王がどんどん贅沢になり、堕落し、そして、殷が周によって滅ぼされる様を表わしているのです。

人間には〝おごり〟という心の働きがあります。そしてこのおごりは、どんどんエスカレートし、しまいにはそのおごりによって自己を破滅へと至らしめます。

ところで、もし殷の紂王がこのような贅沢をせず、そして絶えず謙虚な心でいたとしたならば、ひょっとしたら今も中国は中華人民共和国ではなく、殷だったかもしれませ

んね。なぜならば、殷の王国そのものこそ、神権政治の代表とされる素晴らしい国体だったからです。



❖狗猛ければ則ち酒酸にして售れず

［韓非子、外儲説右上］　宋人有酤酒者。升概甚平、遇客甚謹、為酒甚美、縣幟甚高著。然不售、酒酸。怪其故、問其所知里長者楊倩。倩曰、「汝狗猛耶。」曰、「狗猛則酒何故而不售。」曰、「人畏焉。或令孺子懐銭挈壺甕而往酤、而狗迓而齕之。此酒所以酸而不售也。」夫国亦有狗。有道之士、懐其術而欲以明万乗之主、大臣為猛狗、迎而齕之。此人主之所以蔽脅、而有道之士所以不用也。

【書き下し文】
宋人に酒を酤る者有り。升概甚だ平らかに、客を遇すること甚だ謹み、酒を為ること甚だ美に、幟を縣くること甚だ高く著る。然るに售れずして、酒酸す。其の故を怪しみ、

其の知る所の里の長者楊倩に問う。倩曰く、「汝の狗猛きや」と。曰く、「狗猛ければ則ち酒何の故にして售れざる」と。曰く、「人焉を畏るればなり。或いは孺子をして銭を懐にし、壺甕を挈げて往きて酤わしむるに、狗迓えて之を齕む。此れ酒の酸して售れざる所以なり」と。夫れ国にも亦た狗有り。有道の士、其の術を懐きて以て万乗の主に明らかにせんと欲するも、大臣、猛狗と為り、迎えて之を齕む。此れ人主の蔽脅せらるる所以にして、有道の士の用いられざる所以なり。

【訳】

宋の人に酒を売る者がいた。計り方は大変公正で、客のあしらいも大変丁寧で、造った酒も大変うまいし、看板の旗も高く掲げて大変目立っていた。ところが、酒は売れないで、酸っぱくなってしまう。

その理由がわからないので、知り合いの里の長者である楊倩に尋ねた。倩がいうには、

「お前の家の犬は猛犬かな」と。

そこでいうには、

「猛犬なら、どうして酒が売れないのでしょう」と。

そして、倩がいうには、

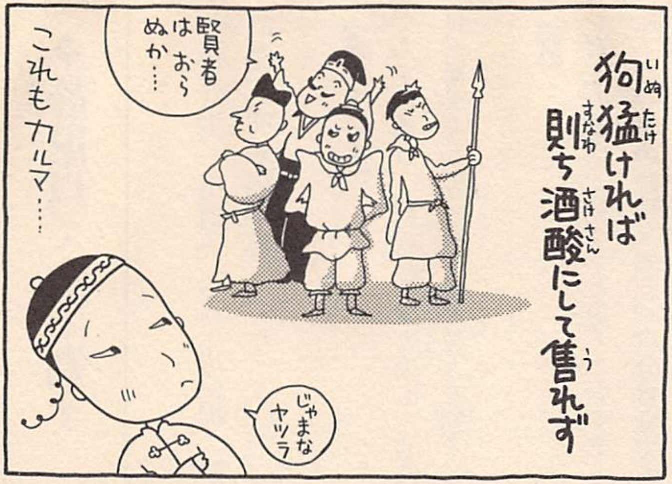
「人々が犬を怖がるからだ。例えば、子供に銭を懐にして、壺を下げて買いにやらせると、犬が待ち構えてかみついたりする。これが、酒が売れず酸っぱくなってしまう理由だよ」と。

そもそも、国にも犬がいるのである。道を心得た士が治国の策を抱いて、大国の主に話そうと思っても、大臣が猛犬となって、待ち受けていてかみつく。これが、君主が奸臣に覆われて脅かされる理由であって、道を心得た士が用いられない理由である。

＊

今日の故事成語は、「狗猛ければ則ち酒酸にして售れず」です。

このことわざは、いかにうまい酒を造り、そして人柄がよく、大いに宣伝していたとしても、その酒屋の前に大変恐ろしい犬が存在するとするならば、その酒屋の酒は売れず、酸っぱくなるという意味です。ところで、なぜ酒が酸っぱくなるのかと。それは、今の酒には防腐剤が使われていますが、その当時の酒には防腐剤が使われておらず、そ



の結果酸化したのです。

ところで、この故事成語の真の意味合いは、いくら素晴らしい君主がいたとしても、その周りに集う臣下がもし道に外れた者、つまり奸臣であるとするならば、どんなに多くの賢者が存在していたとしても、その賢者は立派な君主に近づくことができず、その結果として国は衰退するという裏の意味合いが含まれています。

しかし、これを真理の目から見ると、大変ズレたことわざのように思われます。なぜならば、その臣下を有する君主、これはカルマではないかと。つまり、君主にもし徳が存在するなら、このような奸臣がそばに集まるはずはありませんね。

❖静退以て宝と為す

［韓非子、主道］ 人主之道、静退以為宝、不自操事、而知拙与巧、不自計慮、而知福与咎。

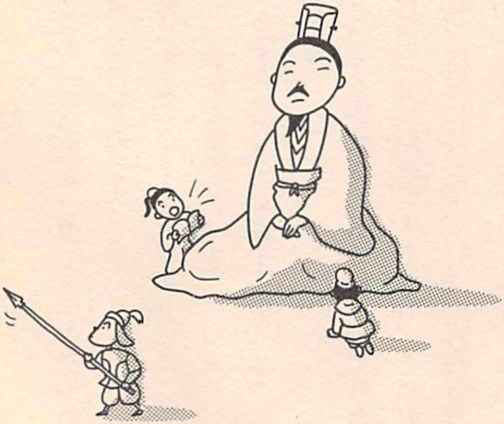
【書き下し文】

人主の道は、静退以て宝と為し、自らは事を操らずして、而も拙と巧とを知り、自らは計慮せずして、而も福と咎とを知る。

【訳】

君主の道は、静けさと退くことを宝とする。君主は自分自身で事を行なわなくとも、臣下の仕事の巧拙を知り、自分自身であれこれと配慮しなくとも、臣下の働きが国家に

幸いしたか災いしたかを知るのである。



今日の故事成語は、「静退以て宝と為す」です。

この「静」とは静か、「退」とは退くという意味です。この静か、退くという二つの態度が、君主にとって大いなる宝であると韓非子は説いているのです。

ところで、真理の最高の実践の一つは、心を寂静にすること——、つまり、ここでいわれている君主の静けさだけではなく、完全なる心の静止を目標とします。つまり、これは「静けさ」「退く」以上の君主にとっての宝であるといわざるを得ません。そして、最高の君主はだれかというと、それは真理勝者なのです。

ところで、ではなぜこの静けさ、あるいは退くといった態度が、君主にとって最高の宝なのでしょうか。まず、現象を見極めるとき、自己の心に動揺がある場合、その対象を正確に認識することはできません。また、猛り狂う臣下に対して、いったん引き、そしてその臣下の進言が正しいかどうかを行動によって判断するということも、これは北伝仏教のマハー・ムドラーの教えに説かれていることなのです。そして、これらの二つは、確かに現象をより正確にわたしたちに見せてくれます。

しかし、本来このような目は、わたしたちの持つ、心の本質から出る神通力に比べた

ら大したことはありません。したがって、わたしは「神通を以て最高の宝とす」という
ことわざが、最も好きなことわざです。



❖事は密なるを以て成り、語は泄るるを以て敗る

［韓非子、説難］　夫事以密成、語以泄敗。未必其身泄之也、而語及所匿之事、如此者身危。

【書き下し文】

夫れ事は密なるを以て成り、語は泄るるを以て敗る。未だ必ずしも其の身之を泄らさず、而も語匿す所の事に及ぶときは、此くの如き者は身危うし。

【訳】

そもそも、事は秘密に運んでこそ成功し、相談ごとは他に漏れると失敗するものである。だから、（遊説家は）必ずしも相手の秘密を漏らすわけではないが、話している際に、

ふと相手の隠していることに触れるなら、このような者は、その身が危ないのである。



今日の故事成語は、「事は密なるを以て成り、語は泄るるを以て敗る」です。

これは、大事に臨んで、わたしたちが心がけなければならないことです。つまり、大きな事業を達成するためには、できるだけ少ない人が秘密裏に事を運んだ方が成功するし、また逆に、その秘密が漏れた場合、その大事業はいろいろな横槍が入り失敗するという故事成語です。

これはなかなか深遠な意味を含んでいます。

仏教の中にも、秘密の教えといわれるタントラヤーナの教えが存在します。そして、このタントラヤーナは、まさに今日の故事成語のとおり、「事は密なるを以て成り、語は泄るるを以て敗る」とおりなのです。つまり、秘密の教えをしっかり遵守し、決して漏らさない。そして、それを達成したとき初めて話すことができるという教えがあります。

では、なぜこの秘密の教えが存在するのでしょうか。それは〝秘密〟という力に意味合いがあるのです。つまりわたしたちは、事を秘密にするとき、その秘密にした事項を絶えず記憶し、そして外に漏れないようにと注意します。そのときにその記憶がより確定され、何度も何度も記憶することによって深く記憶でき、それによってその教えが自

己の中に浸透し、そして達成するという意味合いがあるのです。逆に聞いた教えを簡単に漏らしてしまうということは、その漏れた瞬間から、そのことは大切ではないという意識が生じ、それによって秘密の教えの達成を妨げることとなります。

いずれにしろ、事は秘密にしたいものですね。



❖濫吹（らんすい）

［韓非子、内儲説上］　斉宣王使人吹竽、必三百人。南郭処士請為王吹竽。宣王説之、廩食以数百人。宣王死、湣王立。好一一聴之。処士逃。

【書き下し文】

斉の宣王、人をして竽を吹かしむるや、必ず三百人なり。南郭処士、王の為に竽を吹かんことを請う。宣王之を説び、廩食数百人を以てす。宣王死し、湣王立つ。一一にして之を聴くことを好む。処士逃ぐ。

【訳】

斉の宣王は、楽師に竽を吹かせるのに、いつも三百人に合奏させていた。そこで、南

郭（かく）という処士（しょし）は、王のために竽を吹きたいと申し出た。宣王は喜んで、扶持米（ふちまい）として数百人分を与えた。

やがて、宣王が死んで、湣王（びんおう）が位に就いた。湣王は一人一人別々に吹かせて聴くことを好んだ。そこで処士は逃げ出した。

【注】

・斉の宣王――戦国時代、斉の君主。威王の子。
・斉の湣王――戦国時代、斉の君主。宣王の子。
・南郭――戦国時代、斉の人。処士とは、官途につかず民間にいる人のこと。



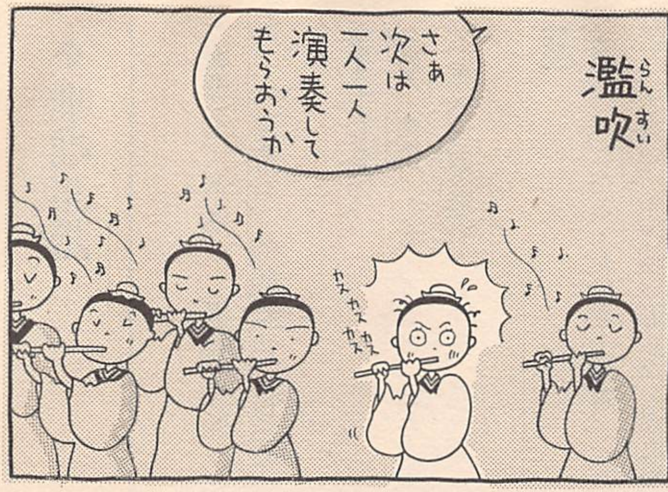
今日の故事成語は、「濫吹（らんすい）」です。この故事成語は、別名「濫于（らんう）」または「南郭濫竽（なんかくらんう）」と呼ばれています。

これは戦国時代、斉（せい）の宣王（せんおう）が、多くの人に同じように笛の合奏をさせることを好みました。そしてそのとき、南郭（なんかく）の処士、つまり南郭という名前の官途につかない士が、「自分もその笛の合奏に加わり、そして王を喜ばせたい」と言ってその合奏に加わり、そして多くの給与を得ました。

しかし、その宣王の死後、湣王（びんおう）が位に就きました。湣王は、笛の合奏より、一人一人が笛を演奏することを好みましたので、南郭の処士は逃げ出してしまいました。つまりこれは、もともと南郭の処士は、笛を吹くことができなかったわけです。しかし、笛隊の一部分に紛れて、高禄を貪っていたという故事成語です。

このことわざの真の意味は、無能の者が才能があるように見せかけ、その位にいることと。つまり、あまりにも部下が多く、しかもそれがチームプレーの場合、無能の士がそこに存在していたとしてもわからないということです。

ところで、わたしと弟子の関係は、決してこの「南郭濫竽」になることはありません。



それはなぜでしょうか。それは、多くの成就における規定が存在するからです。例えば、オウム真理教では、クンダリニー・ヨーガの成就がなされているかどうかを、密閉したチェンバーで測定します。そして、そこで四日間の断水断食、および酸素消費が普通の人と比べて八十パーセント、あるいは七十パーセント程度の低い値を示さない限り、成就者として断定しないのです。

もしこのような試験制度、および個対個の関係が成立しているとするならば、今の日本はもっともっと住みやすい生活になっているかもしれませんね。なぜならば、結構必要のないセクションが国体の中に見受けられますから。

❖唯唯諾諾（いいだくだく）

［韓非子、八姦］　優笑・侏儒・左右・近習、此人主未命而唯唯、未使而諾諾、先意承旨、観貌察色、以先主心者也。

【書き下し文】

優笑（ゆうしょう）・侏儒（しゅじゅ）・左右・近習（きんじゅう）は、此（こ）れ人主、未（いま）だ命ぜずして唯唯（いい）、未だ使わずして諾諾（だくだく）、意に先んじ旨（むね）を承（う）け、貌（かお）を観（み）、色を察し、以（もっ）て主の心に先んずる者なり。

【訳】

道化師・こびと・お付き・近習、これらは、君主がまだ命令しないうちから「はい、はい」と言い、まだ使いもしないうちから「はい、はい」と言い、君主の意向に先回り

してその意図に添うようにし、顔つきを見、顔色を推し量って、君主の心に先回りする者なのである。



今日の故事成語は、「唯唯諾諾（いいだくだく）」です。

これは要するに、「唯唯」も「諾諾」も同じく「ハイハイ」という意味です。つまり、主君の言うことに対して、ただひたすら「ハイハイ、ハイハイ」と言っている臣下の様子を指します。

ところで、この盲従する臣下、これは国体にとってどのように危険なのでしょうか。韓非子（かんぴし）はこれについて、その「唯唯諾諾」のやからに周りの臣下が取り入り、黄金を与えたり、あるいはその者たちのために法をねじ曲げることをうたっています。

そして、これは現在の日本の国体にも見受けられるようにわたしには思われます。この結果、政治は腐敗し、そして国は大いなる危機に瀕するのです。

ところで、真理の実践において、このような唯唯諾諾のやからが、もし宗教上の師であるグルについた場合、どうなるのでしょうか。まず、このような唯唯諾諾のやからの心は大変脆弱（ぜいじゃく）で恐怖心が強いですから、それをまず取り払い、そして自己を主張できるようにします。次に、その唯唯諾諾の表現の背景にある心のけがれ、これをザンゲによって浄化し、そして解脱へと導くのです。



世界すべての魂が、この唯唯諾諾から解放され、そして、公明な政治が展開され、すべての魂が幸福になったらいいですね。

❖ 詘匠（くっしょう）

［韓非子、外儲説左上］　虞慶為屋。謂匠人曰、「屋太尊。」匠人対曰、「此新屋也。塗濡而椽生。夫濡塗重、而生椽撓。以撓椽任重塗。此宜卑。」虞慶曰、「不然。更日久、則塗乾而椽燥。塗乾則軽、椽燥則直、以直椽任軽塗。此益尊。」匠人詘、為之而屋壊。

一曰。虞慶将為屋。匠人曰、「材生而塗濡。夫材生則撓、塗濡則重。以撓任重、今雖成久必壊。」虞慶曰、「材乾則直、塗乾則軽。今誠、得乾日以軽直、雖久必不壊。」匠人詘、作之成。有間屋果壊。

范且曰、「弓之折、必於其尽也、不於其始也。夫工人張弓也、伏檠三旬而蹈弦、一日犯機、是節之其始、而暴之其尽也。焉得無折。伏檠一日而蹈弦、三旬而犯機、是暴之其始、而節之其尽也。」工人窮也、為之弓折。

【書き下し文】

虞慶、屋を為る。匠人に謂いて曰く、「屋、太だ尊し」と。匠人、対えて曰く、「此れ新屋なり。塗濡うて椽生なり。夫れ濡塗は重くして、生椽は撓む。撓椽を以て重塗に任ず。此れ宜しく卑かるべし」と。虞慶曰く、「然らず。日を更ること久しくば、則ち塗乾きて椽燥く。塗乾けば則ち軽く、椽燥けば則ち直し、直椽を以て軽塗に任ず。此れ益ゝ尊からん」と。匠人詘し、之を為して屋壊る。

一に曰く。虞慶、将に屋を為らんとす。匠人曰く、「材生にして塗濡う。夫れ材生ならば則ち撓み、塗濡わば則ち重し。撓むを以て重きに任ず、今成ると雖も久しゅうして必ず壊れん」と。虞慶曰く、「材乾けば則ち直く、塗乾けば則ち軽し。今誠り、乾くを得て日に以て軽直ならば、久しと雖も必ず壊れじ」と。匠人詘し、之を作りて成る。間く有りて屋果して壊る。

范且曰く、「弓の折るるは、必ず其の尽りに於てし、其の始めに於てせざるなり。夫れ工人の弓を張るや、檠に伏すること三旬にして蹈弦し、一日にして機を犯さば、是れ之を其の始めに節して、之を其の尽りに暴するなり。焉んぞ折るること無きを得んや。檠

に伏すること一日にして蹈弦し、三旬にして機を犯さば、是れ之を其の始めに暴して、
之を其の尽りに節するなり」と。工人窮し、之を為して弓折る。

【訳】

虞慶が家を建てた。そこで、大工に告げていうには、
「これでは家が高すぎるぞ」と。
大工がお答えしていうには、
「これは新築です。土は湿っていますし、垂木は生です。そもそも、湿った土は重く、
生の垂木はたわみます。たわむ垂木で重い土を支えるわけですから、おのずと家は低く
なっていくはずです」と。
虞慶がいうには、
「そうではない。建ててから長いこと日が経てば、土は乾き垂木は乾燥する。土が乾け
ば軽くなるし、垂木が乾燥すれば真っすぐになる。真っすぐな垂木で軽い土を支えてい
くのだから、家は益々高くなるだろう」と。

大工はやりこめられ、虞慶の言うとおりにすると、家は壊れた。
一説にはこういう。
虞慶が家を建てようとした。大工がいうには、
「材木が生で、土は湿っています。そもそも、材木が生だとたわみますし、土が湿っていると重くなります。たわむ材木で重い土を支えるわけですから、今はうまくできても、長いこと経つうちにきっと壊れますよ」と。
虞慶がいうには、
「材木が乾けば真っすぐになるし、土が乾けば軽くなる。だから、今、家ができて乾くようになると、土は日増しに軽くなるし、材木は日増しに真っすぐになる。つまり、長いこと経っても、きっと壊れないはずである」と。
大工はやりこめられ、虞慶の言うとおりに作り上げた。しばらくすると、果たして家が壊れた。
范且（はんしょ）がいうには、
「弓が折れるのは、必ず作る過程の終わりの方であって、初めの方ではない。そもそも、

職人が弓を張る場合、弓をため木に三十日もかけてから、弓を踏みつけて弦を張り、一日置いて矢を射てみる。これは、初めを慎重にして、終わりを乱暴にしているのである。どうして折れないことがあろうか。

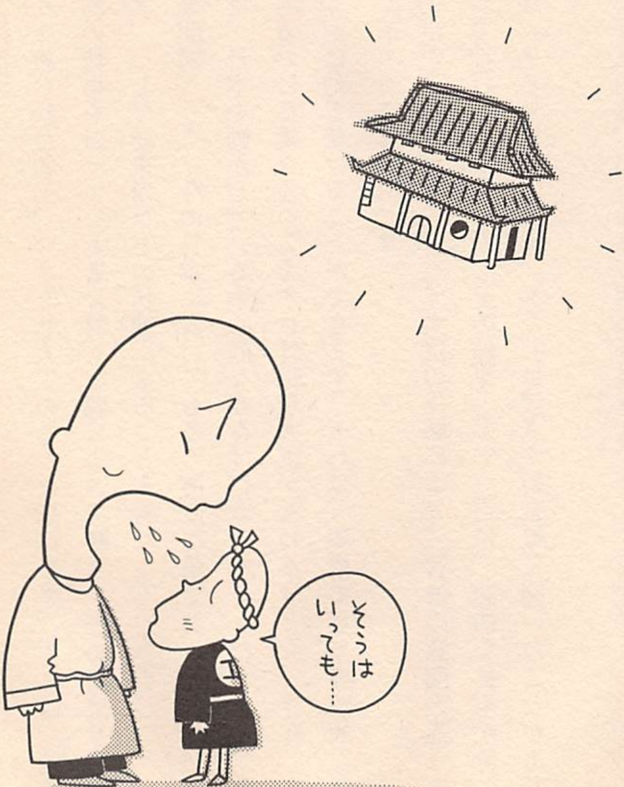
もしため木にかけることを一日にし、それから弓を踏みつけて弦を張り、三十日経ってから矢を射てみるというようにすれば、これは、初めを乱暴にして、終わりを慎重にすることになるのである」と。

職人は返す言葉もなく、范且の言うとおりにすると、弓は折れた。

【注】

・虞慶――戦国時代、趙の遊説の士。

・范且――戦国時代、魏の遊説の士。


そうは
いっても……

今日のことわざは、「詘匠」です。

「詘匠」とは、やりこめられた名工、つまり名大工のことを指します。これは、論の立つ士が、実際は最高の技術を持っている者に対して論によって勝ち、その結果としてその技術が生かされず、そして結末はひどい状態になることを表わしています。

これはしかし、実際問題として、今の日本においても多くある現象であるとわたしは聞いています。例えば、日本を動かしている中心的な存在は官僚です。したがって、大臣が変わろうとも、あるいは極端な言い方をすれば総理大臣が変わろうとも、存在しなかろうと、日本という国は動き続けることができます。それは、現場で長年専門的な経験を有している官僚の存在があるからです。

しかし、たまたま大臣が入れ替わり、そして大臣の体験により、官僚の意図と違う方向に政治が一時的にねじ曲げられる。しかしその結果として、逆に、悲惨な結末が待っているといった例が多々あるということを、わたしは幾人かの官僚に聞いたことがあります。

もともと、論理というものは、いかなる方向にも組み立てることは可能です。しかし、

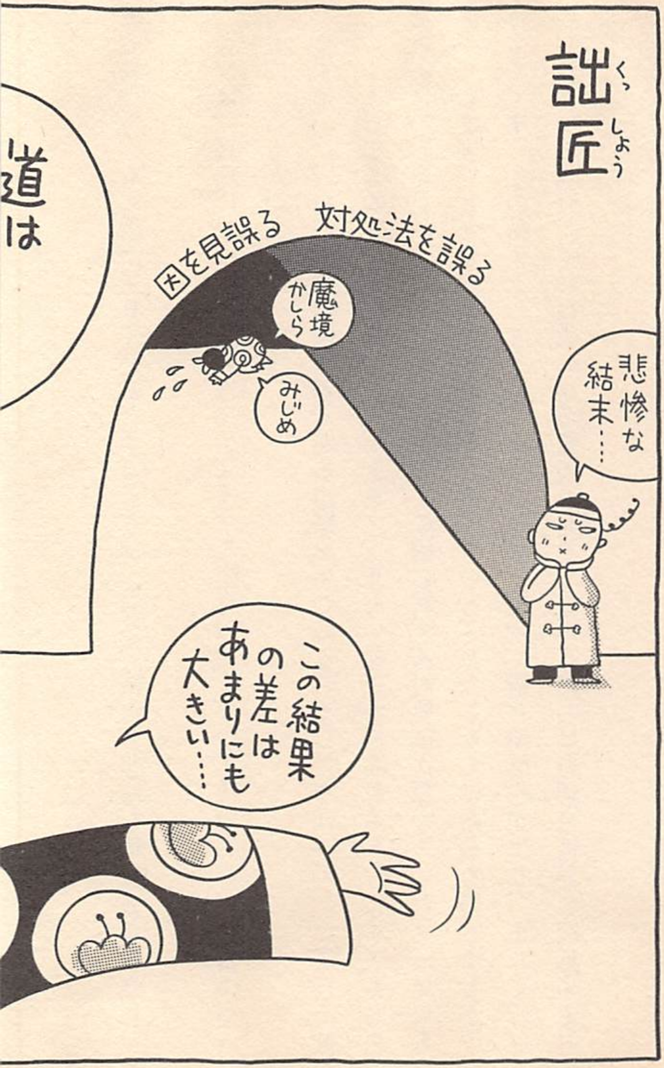
その論理の、もし因がズレているとするならば、当然、結末も悲惨な状態となるでしょう。

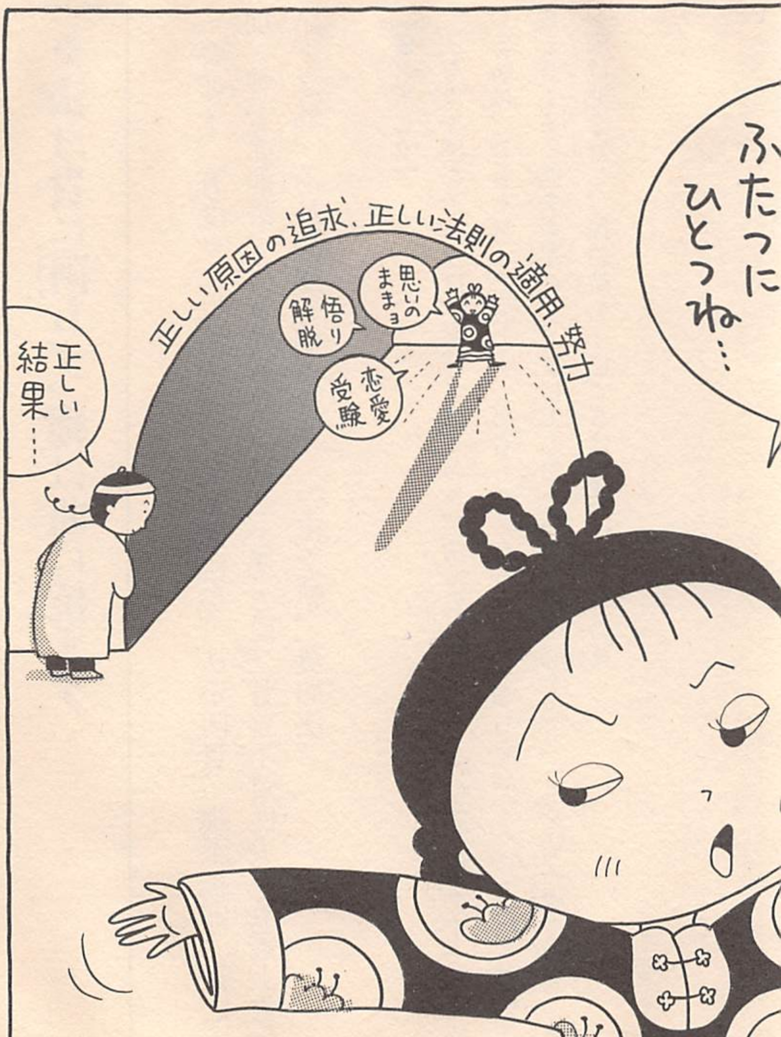
これは、真理における、最高地点へ到達する瞑想の途上での実践である、思索についても同じことがいえます。

まず第一に、自己の内側の原因である煩悩を見つめる。そしてそれに対して正しい教えによる分析をなす。その結果として初めて、正しい結果が得られるわけです。もし自己の内側の因を見誤ったり、あるいは、その因に対する対処法が誤っていれば、結果も違ってきます。しかし、結果が違おうと違うまいと、わたしたちは結論を得ることができるのです。その結果として、正しく行なわれた場合、悟りや解脱が生じ、正しく行なわれなかった場合、それは大いなる魔境となり、わたしたちは悪趣(あくしゅ)の世界を流転するのです。

これは、他のいろいろな現象についても同じことがいえます。受験勉強にしろ、恋愛にしろ、結婚にしろ、あるいは事業を達成させるにしろ、正しい原因の追求、および正しい法則の適用、そしてその二つが相まって、努力という土台により正しい結果が得ら

れるのですよ。
皆さん、しっかりこの言葉を記憶してください。




ふたつに
ひとつね…
正しい原因の追求、正しい法則の適用、努力
思いのままョ
悟り解脱
恋愛受験
正しい結果……

❖法は貴に阿らず、縄は曲に撓まず

〔韓非子、有度〕　以法治国、挙措而已矣。法不阿貴、縄不撓曲。法之所加、智者弗能辞、勇者弗敢争。刑過不避大臣、賞善不遺匹夫。故矯上之失、詰下之邪、治乱決繆、絀羨斉非、一民之軌、莫如法。

【書き下し文】

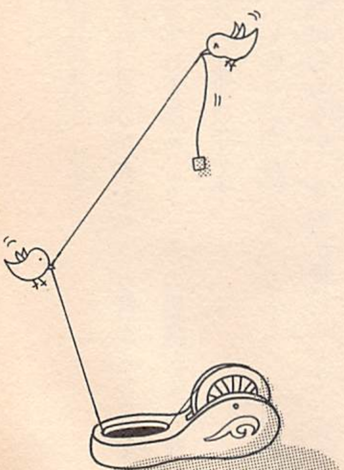
法を以て国を治むるは、挙げて措くのみ。法は貴に阿らず、縄は曲に撓まず。法の加わる所は、智者も辞する能わず、勇者も敢えて争わず。過ちを刑するに大臣を避けず、善を賞するに匹夫を遺れず。故に上の失を矯め、下の邪を詰り、乱を治め繆を決ち、羨を絀け非を斉し、民の軌を一にするは、法に如くもの莫し。

【訳】

法律で国を治めるには、君主は法律を掲げて示すだけでよい。法律が貴人にへつらわないのは、墨縄（すみなわ）が曲がった木材に対しても自らは曲がらないようなものである。

法律が適用されるときは、智者もそれを逃れることができず、勇者も決して争おうとしない。罪過に刑罰を加えるときは、大臣でも遠慮せず、善行を賞賛するときは、一般庶民をも忘れることがない。

したがって、上の者の過失を直し、下の者の邪曲を戒め、乱れた点を治め、もつれた所を解き、出過ぎたものを抑え、間違いを正し、人民の守るべき道を一つにするには、法律に及ぶものはないのである。



今日の故事成語は、「法は貴に阿らず、縄は曲に撓まず」です。

これは、君主が法を中心として治める場合、それは身分が高かろうと低かろうとその法律によって統治すべきであり、それは、墨縄で平行を測るとき、その墨縄が木の曲がりに影響を受けないようなものであるという意味の故事成語です。

つまり、真に国家を法によって統治する場合、いかなる条件があろうとも、その国の人々は、法律によってしっかりと統治されなければならない、その法律によって、信賞必罰も公正に行なわれなければならないという意味合いの故事成語だと考えることができます。

ところで、日本は法治国家です。しかし、身分の高い低いに関係して、多くの不正が行なわれているように思われます。このような国体をつくっているのは、わたしたち一人一人の心の現われです。

例えば、会社に例を採るならば、社長に気に入られた人は、給料以外に多くの利益を得ますし、逆に気に入られていない人は、いろんな形で給料を削減されたりするのが、この資本主義社会の現状でしょう。そして、この資本主義社会を形成している心の働き

の総和が、国体をつくっているのですから、韓非子の言うような理想的な社会ができようはずもありません。

もしわたしたちが真に平等心を培い、そして、それによってすべての魂の幸福を願い、上にいる者が徳によって国を治めることができるとするならば、このような問題も起きないはず。しかし、今の日本人の心の総和では、これは理想論であることは間違いありませんね。



❖ 一夔(いっき)已(すで)に足(た)る

〔韓非子、外儲説左下〕　魯哀公問於孔子曰、「吾聞、『古者有夔、一足。』其果信有一足乎。」孔子対曰、「不也。夔非一足也。夔者忿戾悪心、人多不説喜也。雖然其所以得免於人害者、以其信也。人皆曰、『独此一足矣。』夔非一足也、一而足也。」哀公曰、「審而是、固足矣。」

一曰。哀公問於孔子曰、「吾聞、『夔一足。』信乎。」曰、「夔人也、何故一足。彼其無他異、而独通於声。堯曰、『夔一而足矣。』使為楽正。故君子曰、『夔有一足。』非一足也。」

【書き下し文】

魯(ろ)の哀公(あいこう)、孔子(こうし)に問いて曰(いわ)く、「吾(われ)聞く、『古(いにしえ)に夔(き)有り、一足(いっそく)なり』と。其(そ)れ果たして

信に一足有るか」と。孔子、対えて曰く、「不ざるなり。夔は一足に非ざるなり。夔は忿戻悪心、人多く説喜せざるなり。然りと雖も其の人の害を免るるを得たる所以は、其の信なるを以てなり。人皆曰く、『独り此の一足れり』と。夔は一足に非ざるなり、一にして足れるなり」と。哀公曰く、「審に是くの而くんば、固より足らん」と。

一に曰く。哀公、孔子に問いて曰く、「吾聞く、『夔は一足なり』と。信なるか」と。曰く、「夔は人なり、何の故に一足ならん。彼は其れ他の異無くして、独り声に通ず。堯曰く、『夔は一にして足れり』と、楽正たらしむ。故に君子曰く、『夔は一有りて足れり』と。一足に非ざるなり」と。

【訳】

魯の哀公が孔子に尋ねていうには、

「わたしは、『昔、夔という者がいて、一本足であった』と聞いているが、果たして本当に一本足だったのだろうか」と。

孔子がお答えしていうには、

「そうではありません。夔は一本足ではありません。夔は、怒りっぽく反抗的で意地悪だったので、人々の多くは快く思いませんでした。しかし、こんな人物でも人々に害を加えられなかったのは、彼が正直だったからです。そこで、人は皆、『ただこの一つで足りる』と言ったのです。それは、夔が一本足（一足）だったのではなく、正直一つで足りる（一足）という意味なのです」と。

哀公がいうには、

「全くそのようであるなら、もちろん足りるだろう」と。

一説にはこういう。

哀公が孔子に尋ねていうには、

「わたしは、『夔が一本足であった』と聞いているが、本当だろうか」と。

孔子がいうには、

「夔は人間です。どうして一本足でありましょうか。彼は他と異なっていたわけではありませんが、ただ音楽だけに通じていました。そこで、堯帝は、『夔はこれ一つで足りる』と言って、音楽官の長にしたのです。したがって、君子も、『夔は一つあるだけで足りる

（有一足）』と言ったのであり、一本足（一足）という意味ではありません」と。

【注】

・魯の哀公——春秋時代、魯の君主。
・孔子——春秋時代、魯の人。儒家の祖。
・夔——堯帝の名臣。
・堯帝——中国古代の聖天子の一人。舜（しゅん）帝と並び称される。



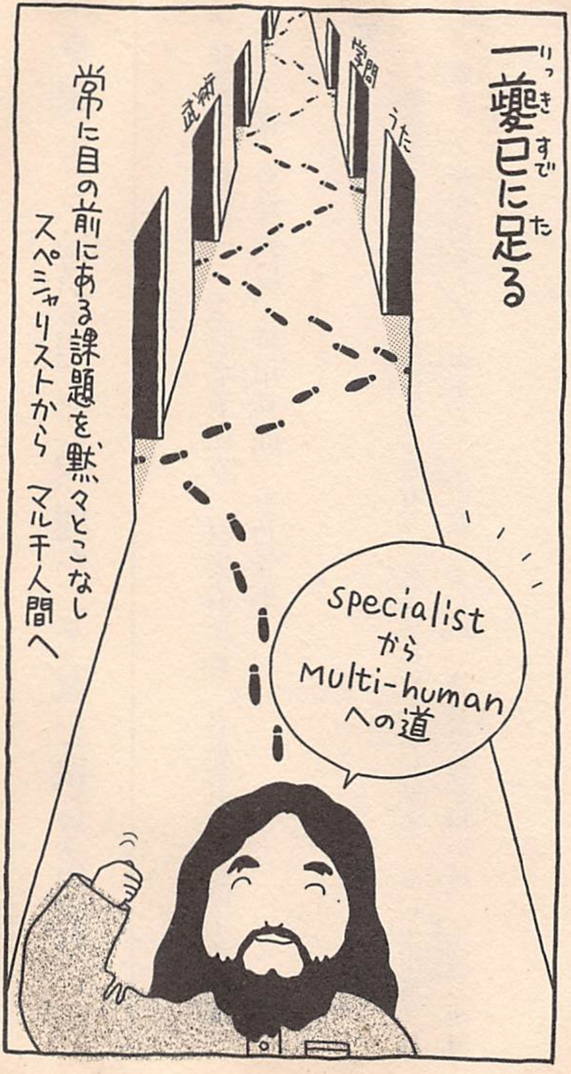
今日の故事成語は、「一夔已に足る」です。

「一夔已に足る」とは、一つの専門分野に秀でている者は、他に多くの欠点を有していたとしても、それを登用すべきであるという故事成語です。「一夔」の「夔」とは人の名前、そして、「已に足る」の「足る」とは、申し分がない、十分であるというふうに解することができるでしょう。

ところでわたしは、まだ十代の後半のころ、次の二つのことを人生の指針として検討していました。それは、この成語に出てくるような、夔の人生、つまりスペシャリストの人生を歩くのか、それともマルチ人間になるのかです。そして、結論として、わたしはまずスペシャリストになり、そこから智慧を発達させ、そしてマルチ人間に至ろうと考えました。そのためには目の前にある課題、例えば歌の練習にしろ、武術にしろ、あるいは学問にしろ、目の前にあることを黙々と全力でこなすしかないという結論を得たのです。そして、今のわたしが存在しています。

確かに、夔のように一芸に秀でる、これは素晴らしいことです。そして、この世界において、一芸に秀でるだけで十分に生きていくことはできます。しかし、この人生を修

行の場だと考え、智慧の発達の場だと考えるならば、少し物足りないような気もします。
あなたは、夔の人生を選びますか？ それとも、わたしの人生を選びますか？



❖鶏（けい）をして夜（よる）を司（つかさど）らしめ、狸（り）をして鼠（ねずみ）を執（と）らえしむ

［韓非子、揚権］ 夫物者有所宜、材者有所施。各処其宜、故上下無為。使雞司夜、令狸執鼠、皆用其能、上乃無事。

【書き下し文】

夫（そ）れ物は宜（よろ）しき所有り、材は施（もち）うる所有り。各々（おのおの）其の宜しきに処（お）る、故に上下（しょうか）為（な）す無し。雞（けい）をして夜を司（つかさど）らしめ、狸（り）をして鼠（ねずみ）を執（と）らえしめ、皆其の能を用いば、上（かみ）乃（すなわ）ち事無からん。

【訳】

そもそも、物にはそれにふさわしい地位があり、才能には適用すべきところがある。

君主が臣下それぞれにふさわしい地位を与えれば、（事がうまく運んで）君主と臣下の間に問題は起こらない。

例えば、鶏に夜明けのときを告げさせ、猫に鼠を捕らえさせるように、臣下が皆それぞれの能力を働かせるなら、君主は何もすることがない。



今日の故事成語は、「鶏をして夜を司らしめ、狸をして鼠を執らえしむ」です。
このことわざの意味合いは、例えば、「朝だ、朝だ」と鳴く鶏、そして、わたしたちの周りを駆け巡る鼠をさっそうと追いかけ、捕らえる猫。これと同じように、鶏には鶏の役割があり、猫には猫の役割がある。つまり、適材適所に人を登用すれば、君主は何もやる必要がないという韓非子の君主論の重要な部分であると思われます。
この意味合いを発展させた形で、漢帝国を打ち立てた劉邦と、そして、その部下の韓信との対話に面白いエピソードが存在します。皇帝となった劉邦は、韓信に聞きました。
「わしはどの程度の部下を従えることができるだろうか」と。
韓信は劉邦に答えました。
「まあ、陛下は十万ほどでしょうか」と。
そこで、劉邦は韓信に聞きました。
「お前はどうかな」と。
韓信は答えました。

「わたしは、兵が多ければ多いほど、それはつまり兵が二十万であろうと三十万であろうと、あるいは百万であろうと、多ければ多いほどそれなりの力を発揮する。」と豪語したのです。そこで、劉邦はニヤリと笑い、韓信に言いました。

「しかしお前は、たったの十万しか兵卒を率いることのできないわたしの臣下になっているではないか」と。

そこで、韓信は答えました。

「陛下の力量は、兵卒を率いることではありません。将軍を率いることにこそ、陛下の才能があるのです」と。

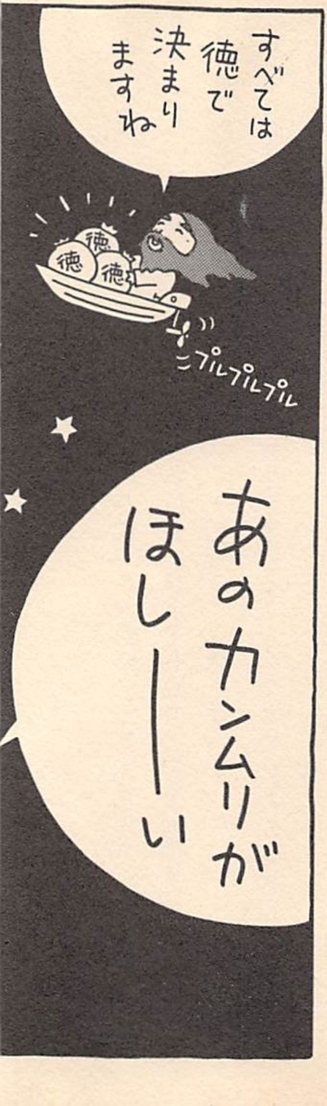
「そして、それは天の与えたものであり、わたしにはそれについてどうすることもできません。」

と答えたのです。つまり、これはまさに、人はその才能において自分の役割を果たすべきであるという中国的考え方の根幹をなす考え方でしょう。

そして人生は、もしあなたに合った場所が与えられるなら、あなたにとって幸福になり、また、あなたに合っていない場所が与えられるなら、それは不幸への道となるでしょう。

ところで、あなたに合った場所が与えられるか、あるいはあなたに合った場所が与えられないか、これはすべて徳で決まるのです。大いなる徳を積み、そして天の恵みを受けた劉邦は、二十世紀最大の皇帝とうたわれた毛沢東のように、天下を統一し、そして大いなる権力、大いなる幸福を得ることができたのです。しかし、劉邦にしろ、毛沢東にしろ、来世はどの世界へ行ったか興味がありますね。そして、彼らがそれを知っていたかどうかは、甚だ疑問です。

あなたがもし本当の真理の実践をなさるなら、この劉邦や、あるいは毛沢東以上の素晴らしい人生を経験し、そして来世を高い世界へと至らせることができるかもしれませんね。




鶏をして夜を司らしめ、狸をして鼠を執らえしむ

❖甲冑（かっちゅう）蟣虱（きしつ）を生（しょう）ず

［韓非子、喩老］天下無道、攻撃不休、相守数年不已、甲冑生蟣虱、燕雀処帷幄、而兵不帰。

【書き下し文】
天下道無ければ、攻撃して休まず、相守ること数年にして已（や）まず、甲冑蟣虱（かっちゅうきしつ）を生じ、燕雀帷幄（えんじゃくいあく）に処（お）るも、兵帰らざらん。

【訳】
天下に道が行なわれないと、（人々は争い、）攻撃しては休むことがなく、お互い守っては数年に渡って続くので、兵士の鎧兜（よろいかぶと）には、しらみの卵やしらみがわき、陣営の天幕

にツバメやスズメが巣を作るようになっても、兵士は帰ることができない。



今日の故事成語は、「甲冑蟣虱を生ず」です。

「甲冑」というのは、皆さんも良く知っている鎧兜のこと。そして、「蟣虱」というのは、しらみの卵と、しらみを指します。つまり、長きにわたる戦争のために、鎧や兜を脱ぐことのできない武将たちが、その中にしらみの卵をたくさん生まれさせ、そしてしらみが生じている様を表わしています。つまりこれは、戦争の長い様を表わしているのです。

ところで、オウム真理教には極厳修行というものがあります。この修行は、短い場合二カ月から三カ月、長い場合には一年、あるいは一年半といった、集中的なトレーニングです。このとき弟子たちは、いっさい眠りを許されず、ただひたすら瞑想、そして呼吸の訓練、それから経行といって歩きながらいろんなものを記憶する訓練に、二十四時間を費やします。そして、このときまさに彼らは意識を修行のみに集中させ、肉体的なけがれにはいっさい頓着することを許されません。いくら戦争が長く続いたといっても、一年半は続きませんよね。

したがって、誇大に表現する中国人の表現形式が、この故事成語に、わたしには表わ



れているように思われます。なぜならば、韓非子の時代の戦争は、さしあたり数十日、あるいは、長くとも数カ月だったと聞いていますから。

ところで、皆さんはしらみが卵からどれくらいで孵るかご存じですか? このしらみの世代から世代までは、たったの二十日なのです。

ところで、日本が第二次世界大戦に没入する以前の中国戦争から、第二次世界大戦までの終了、これはこのしらみの計算でいくと約百世代、つまり、もし甲冑を着ていたら、しらみだらけの甲冑になるくらいの月日が費やされたわけです。したがって、今の戦争、今の紛争の方が、より韓非子の時代より深刻だと思われます。このような苦しみ多き戦争、できたら避けたいものです。

❖文王（ぶんのう） 菖蒲（しょうほ）の葅（そ）を嗜（たしな）む

【韓非子、難四】 或曰、「屈到嗜芰、文王嗜菖蒲葅。非正味也。而二賢尚之。所味不必美。」

【書き下し文】

或（ある）ひと曰（いわ）く、「屈到（くっとう）、芰（ひし）を嗜（たしな）み、文王（ぶんのう）、菖蒲（しょうほ）の葅（そ）を嗜む。正味に非（あら）ざるなり。而（しか）るに二賢、之を尚（とうと）ぶ。味わう所必ずしも美ならず」と。

【訳】

ある人がいうには、

「屈到（くっとう）はひしを好み、文王（ぶんのう）は菖蒲（しょうぶ）のくき漬けを好んだ。両方とも正常な味ではない。け

れども、この二人の賢人はこれを尊重したのである。つまり、人がおいしいというものは、必ずしも美味ではないのである」と。

【注】

・屈到——春秋時代、楚の大臣。
・文王——周の人。武王の父。



今日の故事成語は、「文王 菖蒲の葅を嗜む」です。

これは、文王が一般に好まれている食物ではなく、菖蒲の茎の漬物を好んで食べたということから、人の好みというものは好き好きであるということを表わしています。

そういえば確かに、フランス料理でかたつむりの料理が出たり、あるいは日本の料理の中でどじょうを食べたりといったような例が見受けられます。もともとわたしたちの味覚というものは、人でも食べてしまうような味覚を持ち合わせているわけですから、どの人がどの食べ物を好むかというのは、それはきっと前生の記憶に由来するのでしょうね。

ところでこの文王は、殷の時代、地方豪族であった周の文王のことです。きっとこの文王は、菜食が好みだったのかもしれませんね。

ここで、食事について少し考えてみましょう。食事には四段階のステップがあるとわたしは考えています。

まず第一は、味覚にとらわれる段階。この段階では、何でもとにかく味わってやろうという煩悩優位の状態であると考えることができます。第二は、少し体に気をつけて、

例えば添加物等を取らない段階。このとき、心は肉体を長く生かすことに奔走し、そしてそのため逆に、身体にとらわれる傾向が生じます。第三段階は菜食主義、あるいは自然食主義といわれる古典的食法にとらわれる段階です。しかし、この段階では、多くの殺生というものを根本として食事を取ります。したがって、この一、二、三の段階は、どれも劣った食事であると、わたしは見ているのです。

では最高の食事とは何か——、それは不殺生食です。つまり、いっさい種子、あるいは生きた生き物を殺してすぐ食べるといったようなことを控え、ただこの体が維持できればいいという心で食事を続ける——。そして逆に、この実践ができるならば、最も健康で、そして平安な心が与えられるはずです。なぜならば、成長天の恩恵を受けるのですから。



❖隣人の父を疑う

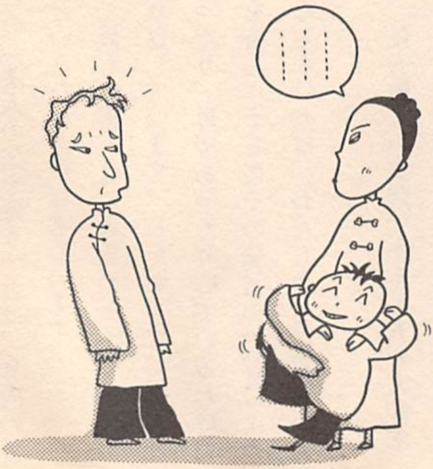
「韓非子、説難」 宋有富人。天雨牆壊。其子曰、「不築必将有盗。」其鄰人之父亦云。暮而果大亡其財。其家甚智其子、而疑鄰人父。

【書き下し文】
宋に富人有り。天雨ありて牆壊る。其の子曰く、「築かずんば必ず将に盗有らんとす」と。其の鄰人の父も亦た云う。暮れにして果たして大いに其の財を亡えり。其の家、甚だ其の子を智として、鄰人の父を疑えり。

【訳】
宋に金持ちがいた。雨が降って塀が崩れた。すると、その家の子がいうには、

「直しておかないと、きっと盗みに遭いますよ」と。

その隣の老人も同じことを言った。夜になると、果たしてごっそり財産を持っていかれた。すると、その家では、自分の子は大変頭がいいと言ったが、隣の老人は怪しいといって疑った。



今日の故事成語は、「隣人の父を疑う」です。この「隣人の父を疑う」とは、身内の言うことは良く取るが、他人の言うことは悪く取るというたとえから来ています。

この「隣人の父を疑う」は、真理の探究において最も障害となる考えの一つです。つまり、わたしたちは無始の過去から輪廻転生を繰り返しています。したがって、例えば今仇として考えている対象が、過去生では父であったり、母であったりしているわけです。したがって、いかなる者に対しても平等の心を持ち、そしてその発言の内容によって、それを是か否か判断することができるようにならなければ、わたしたちは正しい人生を歩いているとはいえないのです。

そして、この平等に対象を見つめる心の実践は、最も難しい実践であるともいえます。なぜならば、わたしたちは、愛著なるがゆえに、あるいは対象に対する敵意や嫌悪なるがゆえに、この人間の世界へと転生しているからなのです。そして、この平等の心を培うことができるならば、あなたには多くの人を使う才能が与えられることでしょう。

あなたは「隣人の父を疑う」を実践しますか？　それとも、真理探究の平等心を培いますか？


隣人の父を疑う
過去世の父だったかもしれない……母だったかもしれない……
無常だなぁ……
……
なつかしい
平等心を培うことができたなら、多くの人を使う才能が与えられる

❖長袖善く舞い、多銭善く賈う

［韓非子、五蠹］　鄙諺曰、「長袖善舞、多銭善賈。」此言多資之易為工也。故治強易為謀、弱乱難為計。

【書き下し文】
鄙諺に曰く、「長袖 善く舞い、多銭善く賈う」と。此れ多資の工を為し易きを言うなり。故に治強は謀を為し易く、弱乱は計を為し難し。

【訳】
ことわざにいうには、
「袖が長ければ上手な舞ができ、持ち金が多ければ上手な商売ができる」と。

これは、資本が多ければ仕事がやりやすいことを言ったものである。だから、強く治まっている国では、計略はやりやすく、弱く乱れている国では、計画は立てにくいのである。



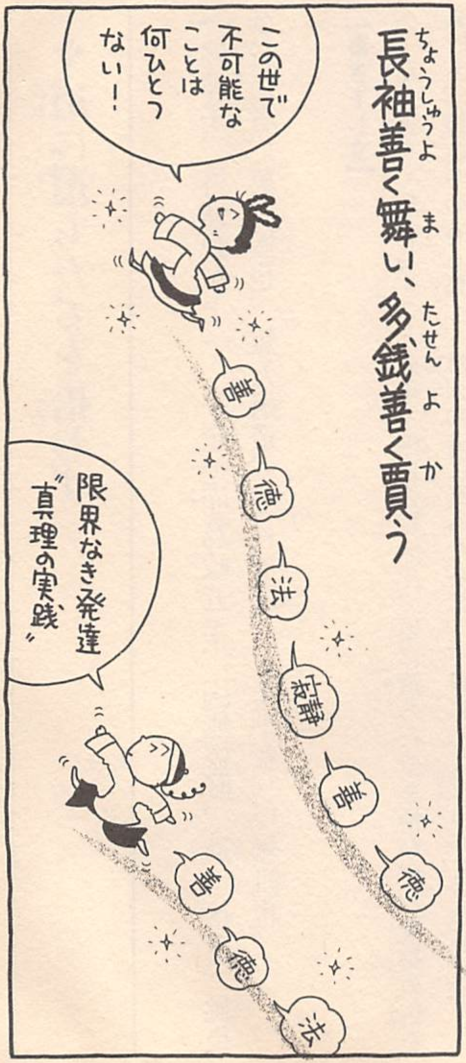
今日の故事成語は、「長袖善く舞い、多銭善く買う」という成語です。

この「長袖」とは長袖のことであり、また「多銭」とは大金持ちということです。つまり、長い袖を着ていると舞いが美しく見えるし、また大金があると商売の成功する率が高いというのがこの意味合いです。

これは、燕と、天下を統一した秦に仕える臣下の立場の違いを述べた成語なのです。つまり、燕は弱小国であり、いくら智慧に長けていたとしても経済的にゆとりがなく、そのためになかなか政策がうまくいかない。逆に、秦は少しぐらいの政策に失敗があったとしても、経済的に豊かだし、また、技術者その他の人材においても豊富ですからうまくいく——、つまりその策を弄している人の実力いかんではなく、条件によってすべては決定されるんだと韓非子は説いています。

しかし、わたしにいわせると、この故事成語はナンセンスのように思われます。本当の智慧者であるならば、その燕を、天下統一に導くことができたはず。なぜそれができなかったのでしょうか。それは、韓非子の智慧には限界があったからであるというのが、わたしの結論です。

では、限界なき発達とは何かと。それは、真理の実践に他なりません。魂が善行をなし、徳行なし、そして法則を理解し実践し、そして心を寂静に至らしめるなら、この世で不可能なことは何一つ存在しないのです。もちろん、その結果を出すまでに、多くの時間が必要である、また、多くの努力が必要であることはいうまでもないことですが……。



❖道に遺ちたるを拾わず

［韓非子、外儲説左上］　子産退而為政五年、国無盗賊、道不拾遺、桃棗蔭於街者、莫有援也、錐刀遺道、三日可反、三年不変、民無飢也。

【書き下し文】
子産、退きて政を為すこと五年、国に盗賊無く、道に遺ちたるを拾わず、桃棗の街を蔭うも、援るもの有る莫く、錐刀の道に遺ちたるは、三日にして反るべく、三年変ぜず、民飢え無きなり。

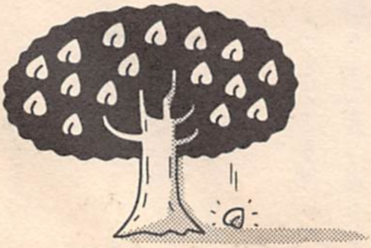
【訳】
子産が（簡公の前から）退出して、政治をとって五年になるころには、国に盗賊はな

くなり、道に落ちているものを拾う人はなく、桃やナツメが実って街路を覆うようになっても取る人はなく、小さな錐を道に落として、三日後そこに戻っても見つけることができた。そして、三年間変わることがなく、民は飢えることがなかった。

【注】

・子産――春秋時代、鄭の大夫。公孫僑の字。

・簡公――春秋時代、鄭の君主。



今日の故事成語は、「道に遺ちたるを拾わず」。この成語は、わたしの大変好きな成語の一つです。

それは、国家における倫理、あるいは道徳の徹底がなされている状態を表わしています。つまり、いくらお金や物が道に落ちていたとしても、それを拾う必要のない国家の状態、あるいは倫理の徹底がなされている状態——、この状態はもちろん、そこに生存した魂は高い世界へ行く条件を、少しは備えているといえるでしょう。

ところで、現在批判されている文化大革命の最中、わたしは次のようなことを聞いたことがあります。それは、中国でいかに物を忘れたとしても、必ず持ち主の元へ返るという話です。

もちろん、文化大革命にはいろいろな問題点もあったでしょう。しかし、その人の物を盗らない実践は、わたしたち真理の実践者にとって欠くべからざる実践の要素の一つであるということはいうまでもありません。もちろんその他に、他の不殺生から始まる戒律が徹底的になされるならば、すでにその国はユートピアといえるのではないでしょうか。


あっ やっぱり ここに 落としてた のね!!
道に遺ちたるを拾わず
3日前のまんまだわ
もし戒律が徹底的になされるならば すでにその国はユートピア!!

❖刻削の道は、鼻は大に如くは莫く、目は小に如くは莫し

［韓非子、説林下］　桓赫曰、「刻削之道、鼻莫如大、目莫如小。鼻大可小、小不可大也。目小可大、大不可小也。」挙事亦然。為其不可復者也、則事寡敗矣。

【書き下し文】

桓赫曰く、「刻削の道は、鼻は大なるに如くは莫く、目は小なるに如くは莫し。鼻の大なるは小にすべきも、小なるは大にすべからざるなり。目の小なるは大にすべきも、大なるは小にすべからざるなり」と。事を挙ぐるも亦た然り。其の復びすべからざる者の為にせば、則ち事敗るること寡なからん。

刻削の道は、鼻は大に如くは莫く、目は小に如くは莫し

【訳】

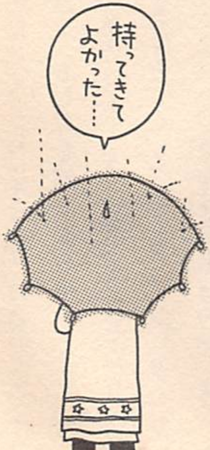
桓赫（かんかく）がいうには、

「人の顔を彫刻する方法だが、鼻は大きくしておく方がよく、目は小さくしておく方がよい。鼻の大きいのは削って小さくすることができるが、小さいのを大きくすることはできない。目の小さいのは刻んで大きくすることができるが、大きいのを小さくすることはできない」と。

事を行なうのもそうである。取り返しのつかないもののために用心しておけば、失敗は少ないものである。

【注】

・桓赫——不詳。



今日の故事成語は、「刻削の道は、鼻は大に如くは莫く、目は小に如くは莫し」です。

これは、例えばわたしたちが彫刻をやろうとして、もし鼻を初めから小さく造ったとするならば、その鼻の修正は難しいですし、また逆に目を大きく造ったとしたならば、当然、目の修正は難しい。つまり、まず概略的な条件をつくり、そして、少しずつ少しずつ焦点を絞り込んでいくことこそが大切であると説いた、韓非子の実務的考えの一つを表わすものであるということができるでしょう。

確かに、この考え方は正しいと思われます。わたしも、仏教、ヨーガ、仙道、密教、気功等、いろいろなものを徹底的に研究しました。そして、そこで到達したのが、最高の道であるテーラヴァーダ、つまり、ヒナヤーナ、マハーヤーナ、タントラヤーナ、ヴァジラヤーナのすべてを含んだ法則の体系でした。もしわたしが、例えば日本密教にとらわれ、あるいは仙道にとらわれ、あるいはヒナヤーナの仏教にとらわれていたとするならば、あるいはヨーガのヒナヤーナ的教えにとらわれたとするならば、今のわたしは存在しなかったでしょう。

したがって、皆さんも自分の人生をまず概略的に設計し、そして少しずつ必要でない

部分を削り落とし、人生の目的を達成していただきたいものです。なぜならば、わたしたちには、たったの一日二十四時間しかないのですから……。



❖虚なれば則ち実の情を知り、静なれば則ち動の正を知る

〔韓非子、主道〕　道者万物之始、是非之紀也。是以明君守始以知万物之源、治紀以知善敗之端。故虚静以待、令名自命也、令事自定也。虚則知実之情、静則知動之正。

【書き下し文】

道は万物の始めにして、是非の紀なり。是を以て明君は始めを守り以て万物の源を知り、紀を治めて以て善敗の端を知る。故に虚静にして以て待ち、名をして自ら命らしめ、事をして自ら定めしむるなり。虚なれば則ち実の情を知り、静なれば則ち動の正を知る。

【訳】

道は万物の根元であり、是非善悪の基本である。だから、明君は根元である道を守って、万物の源を知り、基本を整えて、成功と失敗が何によるのかを知るのである。

したがって、君主は虚静にして待ち構え、臣下の名声を自由に宣伝させ、実際の仕事で自由に実績を示させる。つまり、心を虚しくしていれば、臣下の実情を理解することができるし、心を静かにしていれば、臣下の動きの正否を理解することができるのである。



今日の故事成語は、「虚なれば則ち実の情を知り、静なれば則ち動の正を知る」です。

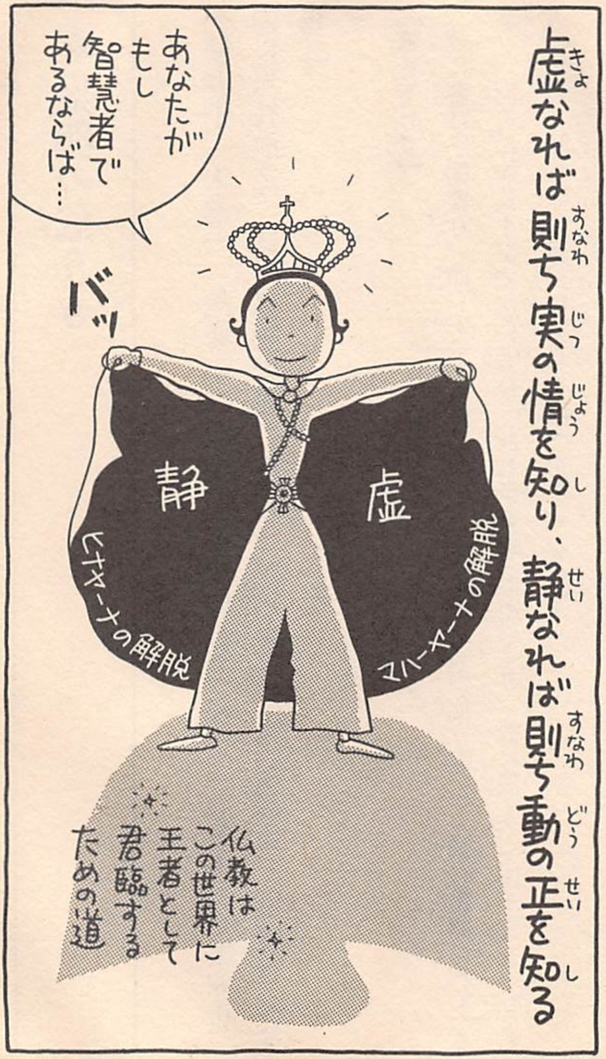
これは、名君たるものの姿勢を述べた、韓非子の素晴らしい名言の一つであるとわたしは思います。つまり、心を空っぽにし、そして臣下の様子をしっかり観察していると、その実情を理解することができるし、また、心が静かであれば、臣下の動きの正否について理解できるということわざです。

ところで、この「虚」の地点へ到達するためには、何をどのように実践したらいいのでしょうか。それは当然、マハーヤーナの修行、そしてマハーヤーナによる解脱が必要であるということができるでしょう。また、「静」はどのようにしたら達成できるのでしょうか。これは当然、ヒナヤーナにおける心の寂静、これこそが最高の「静」であるということができます。

すなわち、仏教は一般的に厭世的、現世否定というふうにとられがちですが、実際は全くその逆、この人生において王者として君臨するための道を説いたもの、それこそが仏教の教えなのです。

さあ、あなたは王者の道である真理、仏教を実践しますか？ それとも、小人の欲望に

翻弄された道を実践しますか？　それは、あなたが智慧者であるかどうかで決まりますね。



❖累卵の危うき

［韓非子、十過］　故曹小国也。而迫於晋・楚之間、其君之危猶累卵也。而以無礼涖之。此所以絶世也。故曰、「国小無礼、不用諫臣、則絶世之勢也。」

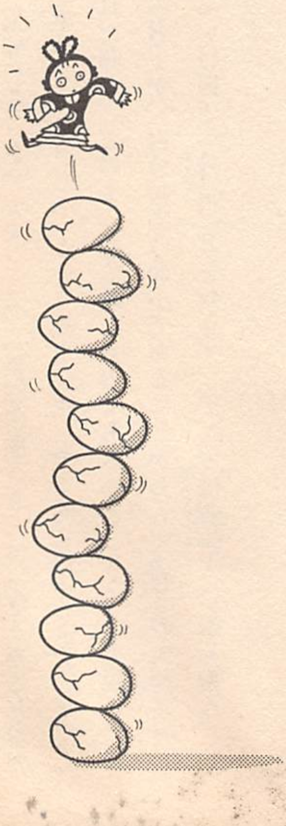
【書き下し文】

故に曹は小国なり。而して晋・楚の間に迫る、其の君の危うきこと猶お累卵のごときなり。而るに無礼を以て之に涖む。此れ世を絶つ所以なり。故に曰く、「国小にして礼無く、諫臣を用いざるは、則ち世を絶つの勢いなり」と。

【訳】

このように曹は小国である。そして、晋と楚の間に挟まれているから、その君主の地位の危険なことは、ちょうど積み重ねた卵のようなものなのに、礼を守らずに応対した。これが、己れの世を滅ぼす理由なのである。

したがって、「国が弱小であるのに礼を守らず、よく諫言する臣下を用いないのは、己れの世を滅ぼす勢力となる」というのである。



今日の故事成語は、「累卵の危うき」です。この「累卵の危うき」は「危うきこと累卵のごとし」、あるいは「累卵より危うし」、という故事成語と全く同じ意味を表わします。

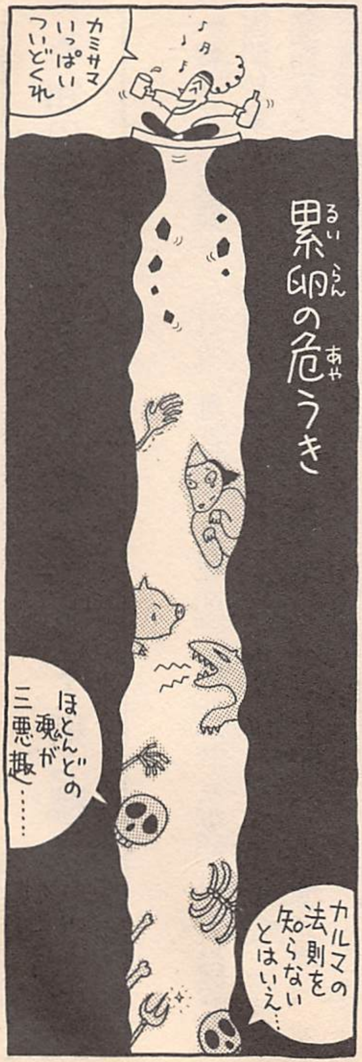
つまり、積み上げられた卵が、どのような危険なものであるかということを説いたものです。これは、小国の君主が、自分の国は弱小であるにかかわらず周りの大国に対して礼を尽くさない、あるいは臣下の諫言に耳を貸さず、そして傍若無人に振る舞うことの危険性を説いたものです。

ところで、わたしたち人間はいろいろな生き物に対して、あるいは神々に対して、この「累卵の危うき」そのままではないかと思います。つまり、わたしたちは、もしカルマの法則を知っていれば、例えば小さな生き物に対しても礼を尽くす、つまりその生命を大切にしようと考えるでしょうし、また、わたしたちより徳の高い神々に対しては、当然、礼拝、供養といった原則的な礼節を尽くすはずです。

しかし、わたしたちは今の自分自身の状態、つまり人間として生まれたこの状態、しかも瞬間瞬間の短い時間的流れしか理解することができません。それによって、わたしたちは小さな生き物や、あるいは神々に対して礼節を尽くさず、それによって「累卵の

危うき」になっているのです。

仏典でも、ほとんどの魂は三つの悪趣、――つまり地獄、動物、低級霊域へと転生すると説かれています。確かに、カルマの法則に照らし合わせて自分自身の生き方を見た場合、ほとんどの人に人間以上の要素が、経験の構成として存在していないことは一目瞭然ですね。



❖知の難きに非ざるなり、知に処すること則ち難きなり

「韓非子、説難」　昔者、鄭武公、欲伐胡。故先以其女妻胡君、以娯其意。因問於羣臣曰、「吾欲用兵。誰可伐者。」大夫関其思対曰、「胡可伐。」武公怒而戮之曰、「胡兄弟之国也。子言伐之何也。」胡君聞之、以鄭為親己、遂不備鄭。鄭人襲胡取之。宋有富人。天雨牆壊。其子曰、「不築必将有盗。」其鄰人之父亦云。暮而果大亡其財。其家甚智其子、而疑鄰人父。此二人、説者皆当矣。厚者為戮、薄者見疑。則非知之難也、処知則難也。

【書き下し文】

昔者、鄭の武公、胡を伐たんと欲す。故に先ず其の女を以て胡君に妻あわせ、以て其の意を娯しましむ。因りて羣臣に問いて曰く、「吾兵を用いんと欲す。誰か伐つべき者ぞ」

と。大夫関其思対えて曰く、「胡伐つべし」と。武公怒りて之を戮して曰く、「胡は兄弟の国なり。子、之を伐てと言うは何ぞや」と。胡君之を聞き、鄭を以て己に親しむと為し、遂に鄭に備えず。鄭人胡を襲いて之を取る。

宋に富人有り。天雨ありて牆壊る。其の子曰く、「築かずんば必ず将に盗有らんとす」と。其の鄰人の父も亦た云う。暮れにして果たして大いに其の財を亡えり。其の家、甚だ其の子を智として、鄰人の父を疑えり。

此の二人、説は皆当たれり。厚き者は戮せられ、薄き者は疑わる。則ち知の難きに非ざるなり、知に処すること則ち難きなり。

【訳】

昔、鄭の武公が、胡を討伐しようとした。そこでまず、公女を胡の君主に嫁がせ、彼の心を楽しませた。

それから、大勢の臣下に尋ねていうには、

「わたしは戦争をしようと思うが、どの国を討伐したらいいだろうか」と。

すると、大夫の関其思がお答えしていうには、
「胡を討伐しましょう」と。
武公は怒り、彼を殺していうには、
「胡は兄弟の国だ。それを討伐しろとは何だ」と。
胡の君主はこれを聞いて、鄭は自分の国に親しみを持っていると思い、とうとう鄭に対して警戒しなくなった。すると、鄭の人が胡を襲い、攻め取ってしまった。
宋に金持ちがいた。雨が降って塀が崩れた。すると、その家の子がいうには、
「直しておかないと、きっと盗みに遭いますよ」と。
その隣の老人も同じことを言った。夜になると、果たしてごっそり財産を持っていかれた。すると、その家では、自分の子は大変頭がいいと言ったが、隣の老人は怪しいといって疑った。
この二人の言説は共に正しかった。しかし、重い方は殺され、軽い方は疑われた。つまり、知るということが難しいのではなく、知っていることにどのように対処するかが難しいのである。

知の難きに非ざるなり、知に処すること則ち難きなり

【注】

・鄭の武公——春秋時代、鄭の君主。

・関其思——春秋時代、鄭の大夫。



今日の故事成語は、「知の難きに非ざるなり、知に処すること則ち難きなり」です。

つまり、この故事成語は、知ることはそれほど難しくなく、その知っていることをいかに適用させるか、いかに使用するかということの方が難しいんだということを説いた韓非子の有名な言葉です。

ところで、韓非子がこの「知の難きに非ざるなり、知に処すること則ち難きなり」を実践したとするならば、きっと秦の重臣として用いられたことは間違いないでしょう。

しかし、事実問題としてこのような話が残されているのです。韓非子は、秦の始皇帝に取り入るため、この『韓非子』という竹簡を献上しました。そして、それを読んだ始皇帝は、彼の政治家としての優秀性、あるいは参謀としての抜群の知性を高く評価しました。

ところが、荀子の門弟であった、そのころの宰相の一人である李斯は、韓非子がこのまま登用されると自分の立場が危ういと感じたのです。そして策謀によって、韓非子を牢中に、そして自殺に追込みました。

このとき、もし韓非子が自分の著作の一部だけを始皇帝に献上し、「あとはわたしの頭

にしかその教えは存在していません」と言ったならばどうだったでしょう。きっと秦の宰相として、後世に名を残す偉大な人物となったに違いありません。つまり、このことわざの真の意味を、彼自身体得していなかったことになりますね。



❖ 櫝を買い珠を還す

［韓非子、外儲説左上］　楚人有売其珠於鄭者。為木蘭之櫃、薫以桂椒、綴以珠玉、飾以玫瑰、輯以翡翠。鄭人買其櫝、而還其珠。此可謂善売櫝矣。未可謂善鬻珠也。今世之談也、皆道弁説文辞之言。人主覧其文、而忘有用。

【書き下し文】

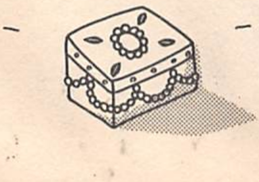
楚人に其の珠を鄭に売る者有り。木蘭の櫃を為り、薫ずるに桂椒を以てし、綴るに珠玉を以てし、飾るに玫瑰を以てし、輯るに翡翠を以てす。鄭人其の櫝を買いて、其の珠を還す。此れ善く櫝を売ると謂うべし。未だ善く珠を鬻ぐと謂うべからざるなり。今の世の談たるや、皆弁説文辞の言を道う。人主其の文を覧て、有用を忘る。

【訳】

楚の人に玉を鄭に売り込んだ者がいた。彼は木蓮で箱を作り、桂や山椒といった香木をくゆらし、真珠や宝玉をつづり合わせたものを垂れかけ、玫瑰の美玉を飾り、翡翠を連ねた。

すると、鄭の人はその箱を買って、中の玉を返した。これでは、箱をうまく売り込んだということはできる。しかしまだ、玉をうまく売りさばいたということはできない。

今の世の談論というのは、みんな巧みな弁舌や飾り立てた言葉を述べるので、君主はそうした表現に気を取られ、それが実際に役に立つかどうかを忘れているのである。



今日の故事成語は、「櫝を買い、珠を還す」です。

このことわざの意味合いは、飾り立てられた箱に珠玉が入っていたとして、その珠玉には目もくれず、その箱に興味を持つ――、つまり、うわべ、外側だけに人々の心が集まり、本当に大切なものには心が向かないたとえです。

現代でも、例えば美しい女性には多くの人が目を向けます。しかし、気立ての優しい女性は、その女性と長くつきあわない限り、なかなかその本質が理解されず価値がわからないもの。しかし、美人はわずか五年や十年で老化し、しわができ、それによって魅力を失いますが、気立ての優しい人がその気立ての優しさをよりいっそう増大させたならば、その人の魅力は年とともに増大します。

そして、わたしたちがこの箱――、つまりうわべを喜ぶのか、それとも珠玉を喜ぶのかによって、人生の生き方はまるっきり別のものとなることは疑いありません。

ではどのようにしたら、わたしたちはわたしたち自身を珠玉に変え、そして最高の状態を形成することができるのでしょうか。それは、偉大な四つの無量心を培うことと、そして、善の修行、徳の修行、寂静の修行、法則の実践を行なうことです。この四無量

心と、善・徳・寂静・法則の実践を行なうならば、わたしたちの心は間違いなく珠玉となり、いやそれだけではなく、わたしたちの人生そのものが珠玉となることは疑いないのです。





あなたに絶対の幸福を約束する

——オウム真理教

心身の悩みを解決したい
超健康体を得たい
豊かな生活を送りたい
素晴らしい人間関係を築きたい
スーパー・パワーを身につけたい
来世も幸福に生きたい
解脱し、永遠の至福を得たい

最高の教義、最高の奥儀、そして麻原尊師のもと、すべては確実に実現します。

●オウム真理教が誇る三つの基本的修行体系

1、マハーヤーナ

現実生活をより豊かにし、幸福な人生をお約束します。ご年輩の方、仕事が忙しく時間のあまり取れない方にお勧めです。

2、タントラ・ヴァジラヤーナ

行法、イニシエーションを中心として進め、霊性を向上させて、神秘世界を実体験することができます。この修行体系を選択すれば今生で解脱し、悟ることも夢ではありません。

3、テーラヴァーダ

原始仏教の上座部仏教を再現しました。真理にのっとって清浄な日常生活を送ることによって、幸せな来世が約束されます。また、経典の記憶修習によって心の成熟が促され、悟りを得ることが可能です。オウム真理教の深遠な教義を徹底的に学びたい方に最適です。

※資料請求券を貼付けしたハガキ、または電話にて最寄りの本・支部までご連絡ください。入信案内等、詳しい資料をお送りします。

キリトリ線

もりもり
智慧のわく書 2
資料請求券

ズバリ！ 真理のメッセージ
リオン・テス・バシレイアス」

中波	720kHz	毎日23:00～ 1:00	
短波	日本語放送	毎日22:00～23:00	
	9月21日～10月31日	12.055MHz	
	11月 1 日～ 3 月 6 日	7.310MHz	
	3月 7 日～ 5 月	15.315MHz	
	英語放送（朝）	毎日 5:30～ 6:00	
	（昼）	毎日 1:30～ 2:00	

※今週の聴きどころなどを毎日紹介。
便利なテレホンサービスもぜひご利用を。
TEL 03（5370）1608

※タイアップマガジン
「えんじょい・はぴねす」 定期購読受付中！



※詳しいお問い合わせは、
「エウアンゲリオン・テス・バシレイアス」係まで。
TEL 03（3335）4965

モスクワからあなたに——
オウム真理教放送「エウアンゲ



尊師の声が あなたの耳を直撃！

麻原尊師が電波にのってあなたのもとへ。
宗教、音楽、科学、神秘……。
盛りだくさんの内容と、
次から次への新しい発見で
眠気も吹っ飛ぶこの時間！
さあ、あなたも今日から尊師を聴こう！

“オウム真理教ネット”



※ただ今、新入会員の方に素敵なプレゼント（えんじょい・はぴねす最新号）をさしあげています。

●なお、その他詳細は下記までお問い合わせください。
〒168 東京都杉並区宮前3-8-11
“オウム真理教ネット” 事務局 TEL 03-5370-1721

好評！あなたとオウムをつなぐ
パソコン通信、

オウムについてもっと詳しく知りたい……
教義その他について、いろいろと聞きたいことがある……
オウムの人たちの生の声を聞いてみたい……
そんなあなたに最適な情報ネットワーク

"オウム真理教ネット" のご紹介

TEL番号	03-5370-1726（三回線） Tri-P利用可能（CXAUMNET）
通信速度	1200/2400bps
通信条件	BITS-8 PARITY-NONE STOP-1
プロトコル	X-MODEM Y-MODEM(-G)
ゲストID	GUEST
運用時間	24時間
入会方法	ゲストログイン後、 SYSOPあてメールにて申請

面倒な手続きはいっさいありません。オウムに興味をお持ちの方、聞いてみたいことがある方は、今すぐお気軽にご利用ください。

PART-13



これが尊師！

B6判　定価570円

雑誌・テレビ・ラジオにと、今大人気の麻原尊師。尊師の人気の秘密は何か？　雑誌社からの取材を中心に、様々な角度から尊師の魅力を探る。

PART-14



宗教の条件

B6判　定価570円

今、本物が明らかになる！　真の宗教の条件とは？　第三次宗教ブームと呼ばれる現在、様々な宗教の中から間違いなく本物を選び出すための条件を、あますところなく説き示す一冊。

PART-15



絶対幸福への道

B6判　定価620円

最終解脱者、麻原彰晃尊師が、幸福になるための最速・最短の道をあなたに伝授する！　あなたを確実に幸福へと導く秘法が満載の、在家修行者座右の書。

PART-16



麻原彰晃　方便品

B6判　定価720円

難解な仏典の比喩・奥儀が現代的に説き明かされた！　釈迦牟尼の深遠な教えの真髄を、最終解脱者麻原尊師が巧みな方便でわかりやすく解説。読んで、考え、実践するための、本物のお経を公開！

PART-17



世界は尊師を待っている

B6判　定価1030円

転換期にあるロシアでの説法、大学での講演、インタビュー等を集めた第一部。テーラヴァーダ仏教のスリランカでの高僧との対談を集めた第二部。四十八ページカラーで尊師の幅広い活動を紹介。

最新刊

PART-18



THE説法Ⅰ
世紀末の危機を乗り越えるために

B6判　定価670円

「解脱が二十一世紀の日本を、そして世界を背負う！」――新しい時代の文明理念が今明らかに！　道なき現代社会に明確な指針を与える麻原尊師の説法集。

PART-19



THE説法Ⅱ
初公開！　タントラ・ヴァジラヤーナ最高の教え

B6判　定価570円

本来ならば直弟子にしか明かされない秘儀、タントラ・ヴァジラヤーナの高度な内容も惜しみなく公開。激動の時代において絶対不動の自己を確立させてくれる麻原尊師の説法の集大成。

（価格にはすべて消費税が含まれています。）

●全国の有名書店にてお求めください。弊社に直接お申し込みの場合は下記まで。

オウム出版　本社　〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17 TEL03(3439)6043 振替 東京2-109325
営業部　〒168 東京都杉並区宮前3-8-11 TEL03(5370)1598


あの名著がグレードアップ！
増補改訂版
生死を超える
麻原彰晃尊師の不朽の大ベストセラー『生死を超える』が、
新しく増補改訂して登場！
麻原尊師の教えに導かれ、
生死を超えて解脱した四十八名の弟子の体験談を、
解脱へのプロセスに沿って掲載した。
真理の御魂（みたま） 最聖麻原彰晃尊師著
B6判 定価1800円
オウム出版
本　社　〒154 東京都世田谷区世田谷2・8・17 TEL03（3439）6043 振替 東京2・109325
営業部　〒168 東京都杉並区宮前3・8・11 TEL 03（5370）1598

仏陀の智慧が光を放ち混迷の時代を照射する

INITIATION

イニシエーション

真理の御魂（みたま） 最聖麻原彰晃尊師著

この名著はすべてを語っていた！

「解脱」「悟り」のプロセスを細やかに説き明かし、最高の修行法を伝授する。
本来、選ばれた弟子にのみ明かされる秘儀——
ヨーガ・仏教の奥儀を極めた修行の正しさは、誕生した三五〇名の解脱者が証明する。
さらに、自民党の大勝と大敗、円高の進行、農作物輸入自由化など、
今日の世界と日本の動向を正確に予言している、
驚くべき記述の数々！

◎「解脱」「悟り」の真実／現代の仏陀麻原彰晃が最高の修行法を公開。
◎タントラ・イニシエーションの全貌／チベット密教・ゲールク派とオウムの秘儀を比較する。
◎確実に核戦争だ！／日本と世界の近未来を予言する。
◎総勢三十一名の体験談／「クンダリニーが覚醒する」「過去世が甦る」「悟りのプロセス」など、これが修行プロセスと霊的ステージの真実だ。

武田 健さん（東京都／学生）
「末法の時代は終わった」ということを確実に感じさせる本である。

松岡謙次さん（愛媛県／警備員）
読めば読むほど、「頑張ろう、やるぞ」と思わせるような素晴らしい本です。

山本 勇さん（石川県／会社員）
解脱するまでの心の状態が、多くの例を挙げてわかりやすく書いてある。

大森恵子さん（山口県／店員）
他の書では得られない絶対なる真理に触れることができた。

武田葉子さん（熊本県／主婦）
「人間として最高の、最終の目的は何か」ということがはっきり示されています。

本間智加子さん（東京都／経理事務）
宗教に対する偏見がいっぺんに吹き飛んでしまいました。



定価2163円 ご注文は書店にてお願いいたします。直接幣社にお申し込みの場合は下記まで。(送料300円)
オウム出版 〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17 電話03(3439)6043 郵便振替 東京2-109325



今明かされる
驚異の能力覚醒プログラム
これであなたも超人類！

能力覚醒の秘法を解く

オウム真理教東大生グループ著

「こんな成績で東大志望なの？」と
教師、友人から嘲笑された彼が
たった一年で現役合格を果たせたその秘密は？
自らの体験をもとにオウム真理教・東大生グループが
超古代からの叡智、原始仏教・ヨーガの秘儀を結集し、
「能力覚醒の秘法」に挑む！

新書判　680円





◇ご注文は書店にお願いいたします。
直接弊社にお申し込みの場合は、下記までご連絡ください。

オウム出版
(本　社) 〒154　東京都世田谷区世田谷2－8－17
☎　03 (3439) 6043／郵便振替　東京2－109325
(営業部) 〒168　東京都杉並区宮前3－8－11／☎　03 (5370) 1598

船橋支部　0474(66)4965
〒274　千葉県船橋市新高根6-26-18
那覇支部　098(869)7707
〒902　沖縄県那覇市安里2-4-12 嘉数グラビアハイツ5F
堺支部　0722(21)1843
〒590　大阪府堺市海山町4-168-9
高崎支部　0273(46)1573
〒370-12　群馬県高崎市倉賀野町 下稲荷前1081-5
福井支部　0776 (26) 6145
〒910　福井県福井市御幸3-3-41 東伸ビル2F
松本支部　0263(28)7429
〒399　長野県松本市芳川野溝527-3
深谷出張所　0485(74)6205
〒366　埼玉県深谷市萱場441-8
渋谷出張所　03(3476)5065
〒150　東京都渋谷区道玄坂1-15-3 プリメーラ道玄坂317号

〈海外支部〉
ニューヨーク支部　212(421)3687
8 East 48th St.#2E (2nd Floor), New York, N.Y. 10017 U.S.A.
ボン支部　(0228)616647
Auf dem Hügel 48, Endenich, 5300 Bonn.1, S.R.Germany
スリランカ支部
(AUM SACCA SAṄGHA ASSOCIATION)
Horahena, Watte, Angulugaha, Galle, Sri Lanka
モスクワ支部　095-451-62-41
Kindergarten No.468 ul. Dybenko, 6A, Moscow, 125475, Russia



この本をお読みになって、どのような感想をお持ちになりましたか。あなたのご意見を、ぜひ下記の「『もりもり智慧のわく書』読者係」までお送りください。

〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17
オウム出版「『もりもり智慧のわく書』読者係」

◆各道場のご案内◆

富士山総本部 0544(54)1267
〒418-01 静岡県富士宮市人穴381-1
東京本部 03(3327)8565
〒156 東京都世田谷区赤堤2-42-5 杉田村松ビル1F
新東京本部 03(3396)9393
〒167 東京都杉並区下井草4-4-4 井口ビル2F
大阪支部 06(397)1022
〒532 大阪府大阪市淀川区西宮原1-8-14 八光ビル2F
福岡支部 092(474)2877
〒812 福岡県福岡市博多区博多駅前2-6-15 第一渡部ビル6F
名古屋支部 052(252)0709
〒460 愛知県名古屋市中区栄5-8-14 万国ビル3F
札幌支部 011(241)4938
〒060 北海道札幌市中央区北2条西2丁目19-1 チサンホテル本館2F
京都支部 075(371)3759
〒600 京都府京都市下京区堀川通り松原上ル五軒町384 松本ビル2F
仙台支部 022(268)3904
〒982 宮城県仙台市若林区河原町1-4-20 十全会ビル2F
金沢支部 0762(51)8457
〒920 石川県金沢市京町25-20 ソフトオフィスビル2+4 2F
高知支部 0888(84)8286
〒780 高知県高知市はりまや町2-8-8 安藤ビル2F
広島支部 082(264)6250
〒732 広島県広島市南区西蟹屋4-4-18 和田ビル3F
横浜支部 045(243)8079
〒231 神奈川県横浜市中区若葉町3-41-2 コスモ伊勢佐木長者町ビル204
和歌山支部 0734(24)2859
〒640 和歌山県和歌山市駿河町42 和歌山酒販会館2F
水戸支部 0292(26)8044
〒310 茨城県水戸市中央2-2-1 HDビル6F



もうもう智慧の湧く書2.

● 韓非子編②

ISBN4-87142-062-0 C7098 P550E 定価550円（本体534円）